

科目名	欧米言語文化研究総合演習 I	科目名 (英文)	Seminar on Western Languages and Cultures I
配当年次	1 年	単位数	2
学期 (開講期)	前期	授業担当者	有馬 善一

授業 (指導) 概要・目的	総合演習 I は英米の地域を中心とした言語・文化など多岐に渡った領域にまたがっているが、その中で大学院学生として各自の研究テーマに沿った指導を受ける。特に本演習は今後 2 年間の指導計画を実施する準備段階であり、担当者と徹底的に研究の方向と方法について議論を深めることが大切である。よって、そのための入門指導を実施し研究倫理について理解したうえで、今後の研究の指針を構築する。
到達目標	各自の研究テーマを掘り下げ、実現可能な計画の下、理論的かつ実践的な基礎知識を獲得することができる。 論文作成や資料収集における研究倫理のあり方を理解することができる。
授業方法と留意点	理論に偏らず、具体的なデータを使用した指導を行う。そのため、単に文献を読むだけでなく、英語の実例を丹念に集めていく作業が必要になる。普段から新聞やニュースなどの英語に触れることが望ましい。
授業 (指導) 計画	学生の研究テーマに即して、最先端の基礎知識を獲得し、理論に偏らず実証的な研究に取り組めるよう、最適な方法を使って指導する。 第 1 回：オリエンテーション、今後の方針の確認。 第 2 回：研究計画テーマの設定および、研究計画の作成。 第 3 回～第 15 回：研究計画にそって、文献の渉猟やデータの収集を進める。
事前・事後学習課題	事前：文献渉猟や読み込み、資料収集・論文作成など各自手必要な作業を行う。 事後：指導教員に指摘された問題点などを検討し、修正していく。
評価基準	授業に取り組む姿勢 50% レポートなどの提出物 50%
教材等	必要に応じて授業中に指示する。
備考	研究発表に関するフィードバックはその都度、レポート等に関するフィードバックは第 15 回目の授業内で行う。

科目名	欧米言語文化研究総合演習 I	科目名 (英文)	Seminar on Western Languages and Cultures I
配当年次	1 年	単位数	2
学期 (開講期)	前期	授業担当者	加来 奈奈

授業 (指導) 概要・目的	総合演習 I は欧米の地域を中心とした言語・文化など多岐に渡った領域にまたがっている。大学院学生として各自の研究テーマに沿った指導を受ける。特に、演習 I は今後 2 年間の指導計画を実施する準備段階であり、担当者と徹底的に研究の方向と方法について議論を深めることが大切である。前期はそのための入門指導を実施し、研究倫理について理解し、今後の研究の指針を構築する。
到達目標	各自の研究テーマを掘り下げ、実現可能な計画の下、理論的かつ実践的な基礎知識を獲得する。 論文作成や資料収集における研究倫理のあり方を理解する。
授業方法と留意点	多様な言語を駆使して文献を集めながら、具体的な史資料を使用した指導を行う。そのため、丹念に外国語の文献を読み、歴史的事象を分析し、史料から実証的に歴史的事象を分析する作業が必要になる。。
授業 (指導) 計画	学生の研究テーマに即して、最先端の基礎知識を獲得し、理論に偏らず実証的な研究に取り組めるよう、最適な方法を使って指導する。  第 1 回目：オリエンテーション、今後の方針の確認。 第 2 回目：研究計画テーマの設定および、研究計画の作成。 第 3 回目-第 1 5 回目：研究計画にそって、文献の渉猟やデータの収集を進める。
事前・事後学習課題	事前：文献渉猟や読み込み、資料収集・論文作成など各自手必要な作業を行う。 事後：指導教員に指摘された問題点などを検討し、修正していく。
評価基準	授業中のプレゼンテーション (50%) 期末レポート (50%)
教材等	授業中に指示する。
備考	

科目名	欧米言語文化研究総合演習 I	科目名 (英文)	Seminar on Western Languages and Cultures I
配当年次	1 年	単位数	2
学期 (開講期)	前期	授業担当者	柏原 郁子

授業 (指導) 概要・目的	総合演習 I は英米の地域を中心とした言語・文化など多岐に渡った領域にまたがっている。大学院学生として各自の研究テーマに沿った指導を受ける。特に本演習は今後 2 年間の指導計画を実施する準備段階であり、担当者と徹底的に研究の方向と方法について議論を深めることが大切である。よって、そのための入門指導を実施し研究倫理について理解したうえで、今後の研究の指針を構築する。
到達目標	(1) 各自の研究テーマを掘り下げ、実現可能な計画のもと、理論的かつ実践的な基礎知識を獲得することができる。 (2) 論文作成や資料収集における研究倫理のあり方を理解することができる。
授業方法と留意点	理論に偏らず、具体的なデータを使用し実証的研究を行う。日頃から英語に触れ、4 技能の高めることが望ましい。
授業 (指導) 計画	学生の研究テーマに即して、最先端の基礎知識を獲得し、理論に偏らず実証的な研究に取り組めるよう、最適な方法を使って指導する。  第 1 回：オリエンテーション、今後の方針の確認。 第 2 回：研究計画テーマの設定および、研究計画の作成。 第 3 回～第 15 回：研究計画にそって、文献の渉猟やデータの収集を進める。
事前・事後学習課題	事前学習：文献渉猟や読み込み、資料収集・論文作成など各自手必要な作業を行う。 事後学習：指導教員に指摘された問題点などを検討し、修正していく。
評価基準	授業への取り組み 20% プレゼンテーション 20% レポート 60%
教材等	授業中に指示する
備考	資料の読み込み、発表の準備などにかかる事前事後の総時間を 60 時間程度とする。

科目名	欧米言語文化研究総合演習 I	科目名 (英文)	Seminar on Western Languages and Cultures I
配当年次	1 年	単位数	2
学期 (開講期)	前期	授業担当者	後藤 一章

授業 (指導) 概要・目的	欧米言語文化研究総合演習は欧米の地域を中心とした言語・文化・思想・歴史と多岐にわたった領域にまたがっており、各々専門の研究者の指導の下、大学院学生として各自の研究テーマにそった指導を受ける。基礎文献・参考文献等、適切な選択をした上で各自のテーマを自分の視点で論文として完成することを目指す。
到達目標	学期終了までに実行可能な修士論文計画を作成する。
授業方法と留意点	面談による個別指導となる。受講生は研究ノートを毎週書き進める。ノートに基づいて指導を行う。
授業 (指導) 計画	学期前半は重要な参考文献、二次資料の収集と読み込みを徹底する。後半に一次資料の収集方法を含めた研究計画の作成を行う。
事前・事後学習課題	毎週、研究ノートを書き進めること。
評価基準	70%は平常点。計画的な資料収集、読み込みを行い、個別指導に出席できているかを評価する。 30%は研究計画。学期終了時のものを評価する。
教材等	個別に指定する。
備考	

科目名	欧米言語文化研究総合演習 I	科目名 (英文)	Seminar on Western Languages and Cultures I
配当年次	1 年	単位数	2
学期 (開講期)	前期	授業担当者	齋藤 安以子

授業 (指導) 概要・目的	総合演習 I は英米の地域を中心とした言語・文化など多岐に渡った領域にまたがっている。大学院学生として各自の研究テーマに沿った指導を受ける。特に、演習 I は今後 2 年間の指導計画を実施する準備段階であり、担当者と徹底的に研究の方向と方法について議論を深めることが大切である。前期はそのための入門指導を実施し、研究倫理について理解し、今後の研究の指針を構築する。
到達目標	各自の研究テーマを掘り下げ、実現可能な計画の下、理論的かつ実践的な基礎知識を獲得する。 論文作成や資料収集における研究倫理のあり方を理解する。
授業方法と留意点	理論に偏らず、具体的なテキストの言葉に注視しながら研究を行う。
授業 (指導) 計画	学生の研究テーマに即して、最先端の基礎知識を獲得し、理論に偏らず実証的な研究に取り組めるよう、最適な方法を使って指導する。 第 1 回目：オリエンテーション、今後の方針の確認。 第 2 回目：研究計画テーマの設定および、研究計画の作成。 第 3 回目—第 1.5 回目：研究計画にそって、文献の渉猟やデータの収集を進める。
事前・事後学習課題	事前：文献渉猟や読み込み、資料収集・論文作成など各自手必要な作業を行う (1 時間)。 事後：指導教員に指摘された問題点などを検討し、修正していく (1 時間)。
評価基準	プレゼンテーション 20% レポート 80%
教材等	授業中に指示する。
備考	資料の読み込み、発表の準備などにかかる事前事後の総時間を 60 時間程度とする。

科目名	欧米言語文化研究総合演習 I	科目名 (英文)	Seminar on Western Languages and Cultures I
配当年次	1 年	単位数	2
学期 (開講期)	前期	授業担当者	鳥居 祐介

授業 (指導) 概要・目的	総合演習 I は欧米の地域を中心とした言語・文化など多岐に渡った領域にまたがっている。大学院学生として各自の研究テーマに沿った指導を受ける。特に、演習 I は今後 2 年間の指導計画を実施する準備段階であり、担当者と徹底的に研究の方向と方法について議論を深めることが大切である。前期はそのための入門指導を実施し、研究倫理について理解し、今後の研究の指針を構築する。
到達目標	各自の研究テーマを掘り下げ、実現可能な計画の下、理論的かつ実践的な基礎知識を獲得する。 論文作成や資料収集における研究倫理のあり方を理解する。
授業方法と留意点	理論に偏らず、具体的なデータを使用した指導を行う。そのため、単に文献を読むだけでなく、英語の実例を丹念に集めていく作業が必要になる。普段から、ニュースやペーパーバックなどの英語に触れることが望ましい。
授業 (指導) 計画	学生の研究テーマに即して、最先端の基礎知識を獲得し、理論に偏らず実証的な研究に取り組めるよう、最適な方法を使って指導する。  第 1 回目：オリエンテーション、今後の方針の確認。 第 2 回目：研究計画テーマの設定および、研究計画の作成。 第 3 回目-第 1 5 回目：研究計画にそって、文献の渉猟やデータの収集を進める。
事前・事後学習課題	事前：文献渉猟や読み込み、資料収集・論文作成など各自手必要な作業を行う。 事後：指導教員に指摘された問題点などを検討し、修正していく。
評価基準	授業中のプレゼンテーション (50%) 期末レポート (50%)
教材等	授業中に指示する。
備考	

科目名	欧米言語文化研究総合演習 I	科目名 (英文)	Seminar on Western Languages and Cultures I
配当年次	1 年	単位数	2
学期 (開講期)	前期	授業担当者	中島 直嗣

授業 (指導) 概要・目的	総合演習 I は英米の地域を中心とした言語・文化など多岐に渡った領域にまたがっているが、その中で大学院学生として各自の研究テーマに沿った指導を受ける。特に本演習は今後 2 年間の指導計画を実施する準備段階であり、担当者と徹底的に研究の方向と方法について議論を深めることが大切である。よって、そのための入門指導を実施し研究倫理について理解したうえで、今後の研究の指針を構築する。
到達目標	各自の研究テーマを掘り下げ、実現可能な計画の下、理論的かつ実践的な基礎知識を獲得することができる。 論文作成や資料収集における研究倫理のあり方を理解することができる。
授業方法と留意点	理論に偏らず、具体的なデータを使用した指導を行う。そのため、単に文献を読むだけでなく、英語の実例を丹念に集めていく作業が必要になる。普段から新聞やニュースなどの英語に触れることが望ましい。
授業 (指導) 計画	学生の研究テーマに即して、最先端の基礎知識を獲得し、理論に偏らず実証的な研究に取り組めるよう、最適な方法を使って指導する。 第 1 回：オリエンテーション、今後の方針の確認。 第 2 回：研究計画テーマの設定および、研究計画の作成。 第 3 回～第 15 回：研究計画にそって、文献の渉猟やデータの収集を進める。
事前・事後学習課題	事前：文献渉猟や読み込み、資料収集・論文作成など各自手必要な作業を行う。 事後：指導教員に指摘された問題点などを検討し、修正していく。
評価基準	授業に取り組む姿勢 50% レポートなどの提出物 50%
教材等	必要に応じて授業中に指示する。
備考	

科目名	欧米言語文化研究総合演習 I	科目名 (英文)	Seminar on Western Languages and Cultures I
配当年次	1 年	単位数	2
学期 (開講期)	前期	授業担当者	船本 弘史

授業 (指導) 概要・目的	総合演習 I は英米の地域を中心とした言語・文化など多岐に渡った領域にまたがっている。大学院学生として各自の研究テーマに沿った指導を受ける。特に本演習は今後 2 年間の指導計画を実施する準備段階であり、担当者と徹底的に研究の方向と方法について議論を深めることが大切である。よって、そのための入門指導を実施し研究倫理について理解したうえで、今後の研究の指針を構築する。
到達目標	(1) 各自の研究テーマを掘り下げ、実現可能な計画のもと、理論的かつ実践的な基礎知識を獲得することができる。 (2) 論文作成や資料収集における研究倫理のあり方を理解することができる。
授業方法と留意点	理論に偏らず、具体的なデータを使用し実証的研究を行う。日頃から英語に触れ、4 技能の高めることが望ましい。
授業 (指導) 計画	学生の研究テーマに即して、最先端の基礎知識を獲得し、理論に偏らず実証的な研究に取り組めるよう、最適な方法を使って指導する。  第 1 回：オリエンテーション、今後の方針の確認。 第 2 回：研究計画テーマの設定および、研究計画の作成。 第 3 回～第 15 回：研究計画にそって、文献の収集やデータの収集を進める。
事前・事後学習課題	事前学習：文献渉猟や読み込み、資料収集・論文作成など各自手必要な作業を行う。 事後学習：指導教員に指摘された問題点などを検討し、修正していく。
評価基準	授業への取り組み 20% プレゼンテーション 20% レポート 60%
教材等	授業中に指示する
備考	レポート等に関するフィードバックは授業内で行う。資料の読み込み、発表の準備などにかかる事前事後の総時間を 60 時間程度とする。

科目名	欧米言語文化研究総合演習Ⅱ	科目名(英文)	Seminar on Western Languages and Cultures II
配当年次	1年	単位数	2
学期(開講期)	後期	授業担当者	有馬 善一

授業(指導)概要・目的	総合演習は英米の地域を中心とした言語・文化など多岐に渡った領域にまたがっているが、その中で大学院学生として各自の研究テーマに沿った指導を受ける。特に本演習は今後2年間の指導計画を実施する準備段階であり、担当者と徹底的に研究の方向と方法について議論を深めることが大切である。よって、そのための指導を実施し研究倫理について理解したうえで、今後の研究の指針を構築する。
到達目標	各自の研究テーマを掘り下げ、実現可能な計画の下、理論的かつ実践的な基礎知識を獲得できる。 論文作成や資料収集における研究倫理のあり方を理解できる。
授業方法と留意点	理論に偏らず、具体的なデータを使用した指導を行う。そのため、単に文献を読むだけでなく、英語の実例を丹念に集めていく作業が必要になる。普段から新聞やニュースなどの英語に触れることが望ましい。
授業(指導)計画	学生の研究テーマに即して、基礎知識を獲得し、理論に偏らず実証的な研究に取り組めるよう、最適な方法を使って指導する。 第1回：欧米言語文化総合演習Ⅰの指導内容に基づき、今後の方針を確認する。 第2回～第15回：研究計画に沿って、文献の渉猟やデータの収集を進める。
事前・事後学習課題	事前：文献渉猟や読み込み、資料収集・論文作成など各自手必要な作業を行う。 事後：指導教員に指摘された問題点などを検討し、修正していく。
評価基準	授業に取り組む姿勢 50% レポートなどの提出物 50%
教材等	必要に応じて授業中に指示する。
備考	研究発表に関するフィードバックはその都度、レポート等に関するフィードバックは第15回目の授業内で行う。

科目名	欧米言語文化研究総合演習Ⅱ	科目名(英文)	Seminar on Western Languages and Cultures II
配当年次	1年	単位数	2
学期(開講期)	後期	授業担当者	加来 奈奈

授業(指導)概要・目的	総合演習Ⅰは欧米の地域を中心とした言語・文化など多岐に渡った領域にまたがっている。大学院学生として各自の研究テーマに沿った指導を受ける。特に、演習Ⅰは今後2年間の指導計画を実施する準備段階であり、担当者と徹底的に研究の方向と方法について議論を深めることが大切である。前期に引き続き、入門指導を実施し、研究倫理について理解し、今後の研究の指針を構築する。
到達目標	各自の研究テーマを掘り下げ、実現可能な計画の下、理論的かつ実践的な基礎知識を獲得する。 論文作成や資料収集における研究倫理のあり方を理解する。
授業方法と留意点	主要な先行研究を集め分析し、具体的に分析する史料を探し、丹念に読んでいく作業に重きを置く。
授業(指導)計画	学生の研究テーマに即して、最先端の基礎知識を獲得し、理論に偏らず実証的な研究に取り組めるよう、最適な方法を使って指導する。 第1回目:オリエンテーション、今後の方針の確認。 第2回目:研究計画テーマの設定および、研究計画の作成。 第3回目-第1.5回目:研究計画にそって、文献の渉猟やデータの収集を進める。
事前・事後学習課題	事前:文献渉猟や読み込み、資料収集・論文作成など各自手必要な作業を行う。 事後:指導教員に指摘された問題点などを検討し、修正していく。
評価基準	毎回の発表50パーセント、レポート50パーセント
教材等	授業中に指示する。
備考	履修者なし

科目名	欧米言語文化研究総合演習Ⅱ	科目名（英文）	Seminar on Western Languages and Cultures II
配当年次	1年	単位数	2
学期（開講期）	後期	授業担当者	柏原 郁子

授業（指導）概要・目的	総合演習Ⅰは英米の地域を中心とした言語・文化など多岐に渡った領域にまたがっている。大学院学生として各自の研究テーマに沿った指導を受ける。特に本演習は今後2年間の指導計画を実施する準備段階であり、担当者と徹底的に研究の方向と方法について議論を深めることが大切である。よって、そのための入門指導を実施し研究倫理について理解したうえで、今後の研究の指針を構築する。
到達目標	(1) 各自の研究テーマを掘り下げ、実現可能な計画の下、理論的かつ実践的な基礎知識を獲得することができる。 (2) 論文作成や資料収集における研究倫理のあり方を理解することができる。
授業方法と留意点	理論に偏らず、具体的なデータを使用し実証的研究を行う。日頃から英語に触れ、4技能の高めることが望ましい。 学生の研究テーマに即して、最先端の基礎知識を獲得し、理論に偏らず実証的な研究に取り組めるよう、最適な方法を使って指導する。
授業（指導）計画	第1回：オリエンテーション、今後の方針の確認。 第2回：研究計画テーマの設定および、研究計画の作成。 第3回～第15回：研究計画にそって、文献の渉猟やデータの収集を進める。
事前・事後学習課題	事前学習：文献渉猟や読み込み、資料収集・論文作成など各自手必要な作業を行う。 事後学習：指導教員に指摘された問題点などを検討し、修正していく。
評価基準	演習への取り組み 30% プレゼンテーション 20% レポート 50%
教材等	授業中に指示する
備考	資料の読み込み、発表の準備などにかかる事前事後の総時間を60時間程度とする。

科目名	欧米言語文化研究総合演習Ⅱ	科目名(英文)	Seminar on Western Languages and Cultures II
配当年次	1年	単位数	2
学期(開講期)	後期	授業担当者	後藤 一章

授業(指導)概要・目的	欧米言語文化研究総合演習は欧米の地域を中心とした言語・文化・思想・歴史と多岐にわたった領域にまたがっており、各々専門の研究者の指導の下、大学院学生として各自の研究テーマにそった指導を受ける。基礎文献・参考文献等、適切な選択をした上で各自のテーマを自分の視点で論文として完成することを目指す。
到達目標	学期終了時には修士論文の一部の執筆を開始できる状態にする。
授業方法と留意点	面談による個別指導となる。受講生は研究ノートを毎週書き進める。ノートに基づいて指導を行う。
授業(指導)計画	前期の計画を改訂しながら、週一回の面談指導に従い、研究を進める。
事前・事後学習課題	毎週、研究ノートを書き進めること。
評価基準	70%は平常点。計画的な資料収集、読み込みを行い、個別指導に出席できているかを評価する。 30%は改訂した研究計画。学期終了時のものを評価する。
教材等	個別に指定する。
備考	

科目名	欧米言語文化研究総合演習Ⅱ	科目名（英文）	Seminar on Western Languages and Cultures II
配当年次	1年	単位数	2
学期（開講期）	後期	授業担当者	齋藤 安以子

授業（指導）概要・目的	総合演習Ⅰは英米の地域を中心とした言語・文化など多岐に渡った領域にまたがっている。大学院学生として各自の研究テーマに沿った指導を受ける。特に、演習Ⅰは今後2年間の指導計画を実施する準備段階であり、担当者と徹底的に研究の方向と方法について議論を深めることが大切である。前期に引き続き、入門指導を実施し、研究倫理について理解し、今後の研究の指針を構築する。
到達目標	各自の研究テーマを掘り下げ、実現可能な計画の下、理論的かつ実践的な基礎知識を獲得する。 論文作成や資料収集における研究倫理のあり方を理解する。
授業方法と留意点	理論に偏らず、具体的なテキストの言葉に注視しながら研究を行う。
授業（指導）計画	学生の研究テーマに即して、最先端の基礎知識を獲得し、理論に偏らず実証的な研究に取り組めるよう、最適な方法を使って指導する。 第1回目：オリエンテーション、今後の方針の確認。 第2回目：研究計画テーマの設定および、研究計画の作成。 第3回目―第1.5回目：研究計画にそって、文献の渉猟やデータの収集を進める。
事前・事後学習課題	事前：文献渉猟や読み込み、資料収集・論文作成など各自手必要な作業を行う（1時間）。 事後：指導教員に指摘された問題点などを検討し、修正していく（1時間）。
評価基準	プレゼンテーション 20% レポート 80%
教材等	授業中に指示する。
備考	資料の読み込み、発表の準備などにかかる事前事後の総時間を60時間程度とする。

科目名	欧米言語文化研究総合演習Ⅱ	科目名（英文）	Seminar on Western Languages and Cultures II
配当年次	1年	単位数	2
学期（開講期）	後期	授業担当者	鳥居 祐介

授業（指導）概要・目的	総合演習Ⅰは欧米の地域を中心とした言語・文化など多岐に渡った領域にまたがっている。大学院学生として各自の研究テーマに沿った指導を受ける。特に、演習Ⅰは今後2年間の指導計画を実施する準備段階であり、担当者と徹底的に研究の方向と方法について議論を深めることが大切である。前期に引き続き、入門指導を実施し、研究倫理について理解し、今後の研究の指針を構築する。
到達目標	各自の研究テーマを掘り下げ、実現可能な計画の下、理論的かつ実践的な基礎知識を獲得する。 論文作成や資料収集における研究倫理のあり方を理解する。
授業方法と留意点	理論に偏らず、具体的なテキストの言葉に注視しながら研究を行う。
授業（指導）計画	学生の研究テーマに即して、最先端の基礎知識を獲得し、理論に偏らず実証的な研究に取り組めるよう、最適な方法を使って指導する。 第1回目：オリエンテーション、今後の方針の確認。 第2回目：研究計画テーマの設定および、研究計画の作成。 第3回目～第5回目：研究計画にそって、文献の渉猟やデータの収集を進める。
事前・事後学習課題	事前：文献渉猟や読み込み、資料収集・論文作成など各自手必要な作業を行う。 事後：指導教員に指摘された問題点などを検討し、修正していく。
評価基準	プレゼンテーション 20% レポート 80%
教材等	授業中に指示する。
備考	

科目名	欧米言語文化研究総合演習Ⅱ	科目名(英文)	Seminar on Western Languages and Cultures II
配当年次	1年	単位数	2
学期(開講期)	後期	授業担当者	中島 直嗣

授業(指導)概要・目的	総合演習は英米の地域を中心とした言語・文化など多岐に渡った領域にまたがっているが、その中で大学院学生として各自の研究テーマに沿った指導を受ける。特に本演習は今後2年間の指導計画を実施する準備段階であり、担当者と徹底的に研究の方向と方法について議論を深めることが大切である。よって、そのための指導を実施し研究倫理について理解したうえで、今後の研究の指針を構築する。
到達目標	各自の研究テーマを掘り下げ、実現可能な計画の下、理論的かつ実践的な基礎知識を獲得できる。 論文作成や資料収集における研究倫理のあり方を理解できる。
授業方法と留意点	理論に偏らず、具体的なデータを使用した指導を行う。そのため、単に文献を読むだけでなく、英語の実例を丹念に集めていく作業が必要になる。普段から新聞やニュースなどの英語に触れることが望ましい。
授業(指導)計画	学生の研究テーマに即して、基礎知識を獲得し、理論に偏らず実証的な研究に取り組めるよう、最適な方法を使って指導する。 第1回: 欧米言語文化総合演習Ⅰの指導内容に基づき、今後の方針を確認する。 第2回～第15回: 研究計画に沿って、文献の渉猟やデータの収集を進める。
事前・事後学習課題	事前: 文献渉猟や読み込み、資料収集・論文作成など各自手必要な作業を行う。 事後: 指導教員に指摘された問題点などを検討し、修正していく。
評価基準	授業に取り組む姿勢 50% レポートなどの提出物 50%
教材等	必要に応じて授業中に指示する。
備考	

科目名	欧米言語文化研究総合演習Ⅱ	科目名（英文）	Seminar on Western Languages and Cultures II
配当年次	1年	単位数	2
学期（開講期）	後期	授業担当者	船本 弘史

授業（指導）概要・目的	総合演習Ⅰは英米の地域を中心とした言語・文化など多岐に渡った領域にまたがっている。大学院学生として各自の研究テーマに沿った指導を受ける。特に本演習は今後2年間の指導計画を実施する準備段階であり、担当者と徹底的に研究の方向と方法について議論を深めることが大切である。よって、そのための入門指導を実施し研究倫理について理解したうえで、今後の研究の指針を構築する。
到達目標	(1) 各自の研究テーマを掘り下げ、実現可能な計画の下、理論的かつ実践的な基礎知識を獲得することができる。 (2) 論文作成や資料収集における研究倫理のあり方を理解することができる。
授業方法と留意点	理論に偏らず、具体的なデータを使用し実証的研究を行う。日頃から英語に触れ、4技能の高めることが望ましい。
授業（指導）計画	学生の研究テーマに即して、最先端の基礎知識を獲得し、理論に偏らず実証的な研究に取り組めるよう、最適な方法を使って指導する。  第1回：オリエンテーション、今後の方針の確認。 第2回：研究計画テーマの設定および、研究計画の作成。 第3回～第15回：研究計画にそって、文献の収集やデータの収集を進める。
事前・事後学習課題	事前学習：文献渉猟や読み込み、資料収集・論文作成など各自手必要な作業を行う。 事後学習：指導教員に指摘された問題点などを検討し、修正していく。
評価基準	演習への取り組み 30% プレゼンテーション 20% レポート 50%
教材等	授業中に指示する
備考	レポート等に関するフィードバックは授業内で行う。資料の読み込み、発表の準備などにかかる事前事後の総時間を60時間程度とする。

科目名	欧米言語文化研究総合演習Ⅲ	科目名（英文）	Seminar on Western Languages and Cultures III
配当年次	2年	単位数	2
学期（開講期）	前期	授業担当者	有馬 善一

授業（指導）概要・目的	欧米言語文化研究総合演習Ⅰ、Ⅱで行った研究調査をさらに精査し、研究指導計画にもとづいて、修士論文作成の準備に取りかかる。担当教員と討議したスケジュールにもとづいて、計画的に文献の渉猟、データの収集を行いながら、論文の章立てにそって作成にとりかかる。作成の過程で、さらに指導教員との議論を重ねながら、内容をより深めていく。
到達目標	各自の研究テーマに基づいて、修士論文の具体的な方向性について検討し、以下のような点を目標とする。 <ul style="list-style-type: none"> <li>論文作成にかかるスケジュールを決め、計画的な執筆ができるようになる。</li> <li>関連する文献の内容を理解できるようになる。</li> <li>修士論文を書き始め、疑問点などを明らかにし、それに自らの解答を準備できるようになる。</li> </ul>
授業方法と留意点	先行研究の徹底的な読み込みとデータの綿密な収集を行い、修士論文の内容につなげていく。
授業（指導）計画	第1回～第15回：先行研究の検討や収集した具体例にもとづいて、指導担当者と討論を行い、修士論文の内容をより妥当性のあるものにしていく。
事前・事後学習課題	事前：文献の渉猟と読み込み、具体例の収集など、修士論文作成に必要な作業を各自で行う。 事後：指導担当者と討論を受けて、問題点などを修正する。
評価基準	授業に取り組む姿勢 50% レポートなどの提出物 50%
教材等	必要に応じて授業中に指示する。
備考	研究発表に関するフィードバックはその都度、レポート等に関するフィードバックは第15回目の授業内で行う。

科目名	欧米言語文化研究総合演習Ⅲ	科目名(英文)	Seminar on Western Languages and Cultures III
配当年次	2年	単位数	2
学期(開講期)	前期	授業担当者	加来 奈奈

授業(指導)概要・目的	<p>欧米言語文化研究総合演習Ⅰ,Ⅱで行った研究調査をさらに精査し、研究指導計画にもとづいて、修士論文作成の準備に取りかかる。</p> <p>担当教員と討議したスケジュールにもとづいて、計画的に文献の渉猟、データの収集を行いながら、論文の章立てにそって作成にとりかかる。作成の過程で、さらに指導教員との議論を重ねながら、内容をより深めていく。</p>
到達目標	<p>各自の研究テーマにもとづいて、修士論文の具体的な方向性をもつ。</p> <p>論文作成にかかるスケジュールを決め、計画的な執筆ができるようになる。</p> <p>関連する文献の内容を理解できるようになる。</p> <p>修士論文を書き始め、疑問点などを明らかにし、それに自らの解答を準備できるようになる。</p>
授業方法と留意点	<p>先行研究の徹底的な読み込みと、史料の分析を行い、修士論文の内容につなげていく。</p>
授業(指導)計画	<p>第1回目ー第15回目：先行研究の検討や収集した具体例にもとづいて、指導担当者と討論を行い、修士論文の内容をより妥当性のあるものにしていく。</p>
事前・事後学習課題	<p>事前：文献の渉猟と読み込み、具体例の収集など、修士論文作成に必要な作業を各自で行う。</p> <p>事後：指導担当者との討論を受けて、問題点などを修正する。</p>
評価基準	<p>授業中のプレゼンテーション(50%)</p> <p>修士論文の下書きを含めたレポート(50%)</p>
教材等	<p>授業中に指示する。</p>
備考	

科目名	欧米言語文化研究総合演習Ⅲ	科目名(英文)	Seminar on Western Languages and Cultures III
配当年次	2年	単位数	2
学期(開講期)	前期	授業担当者	柏原 郁子

授業(指導)概要・目的	欧米言語文化研究総合演習Ⅰ、Ⅱで行った研究調査をさらに精査し、研究指導計画にもとづいて、修士論文作成の準備に取りかかる。担当教員と討議したスケジュールにもとづいて、計画的に文献の渉猟し、資料・データの収集を行いながら、論文の章立てにそって作成にとりかかる。作成の過程で、さらに指導教員との議論を重ねながら、内容をより深めていく。
到達目標	(1) 論文作成にかかるスケジュールを決め、計画的な執筆ができる。 (2) 関連する文献の内容を理解できる。 (3) 修士論文をまとめるにあたり、問題点などを明らかにし、解答を導く的確な資料・文献を渉猟できるようになる。
授業方法と留意点	先行研究の徹底的な読み込みとデータの綿密な収集を行い、修士論文の内容につなげていく。
授業(指導)計画	学生の研究テーマに即して、最先端の基礎知識を獲得し、理論に偏らず実証的な研究に取り組めるよう、最適な方法を使って指導する。 第1回:オリエンテーション、今後の方針の確認。 第2回:研究計画テーマの設定および、研究計画の作成。 第3回～第15回:研究計画にそって、文献の渉猟やデータの収集を進める。
事前・事後学習課題	事前:文献の渉猟と読み込み、具体例の収集など、修士論文作成に必要な作業を各自で行う。 事後:指導担当者との討論を受けて、問題点などを修正する。
評価基準	プレゼンテーション 20% レポート 80%
教材等	授業中に指示する
備考	資料の読み込み、発表の準備などにかかる事前事後の総時間を60時間程度とする。

科目名	欧米言語文化研究総合演習Ⅲ	科目名(英文)	Seminar on Western Languages and Cultures III
配当年次	2年	単位数	2
学期(開講期)	前期	授業担当者	後藤 一章

授業(指導)概要・目的	欧米言語文化研究総合演習は欧米の地域を中心とした言語・文化・思想・歴史と多岐にわたった領域にまたがっており、各々専門の研究者の指導の下、大学院学生として各自の研究テーマにそった指導を受ける。基礎文献・参考文献等、適切な選択をした上で各自のテーマを自分の視点で論文として完成することを目指す。
到達目標	学期終了時には修士論文の一部が執筆されており、完成までに必要な追加の資料収集と執筆の計画が明確になっているようにする。
授業方法と留意点	面談による個別指導となる。受講生は研究ノート、修士論文原稿を毎週書き進める。それらに基づいて指導を行う。
授業(指導)計画	週一回の面談指導に従い、研究を進める。
事前・事後学習課題	毎週、少しでも研究、執筆を進めること。
評価基準	70%は平常点。計画的な資料収集、読み込みを行い、個別指導に出席できているかを評価する。 30%は修士論文原稿の一部。学期終了時のものを評価する。
教材等	個別に指定する。
備考	

科目名	欧米言語文化研究総合演習Ⅲ	科目名(英文)	Seminar on Western Languages and Cultures III
配当年次	2年	単位数	2
学期(開講期)	前期	授業担当者	齋藤 安以子

授業(指導)概要・目的	欧米言語文化研究総合演習Ⅰ,Ⅱで行った研究調査をさらに精査し、研究指導計画にもとづいて、修士論文作成の準備に取りかかる。
到達目標	各自の研究テーマにもとづいて、修士論文の具体的な方向性をもつ。 修士論文の下書きを書き始める。
授業方法と留意点	先行研究の徹底的な読み込みとデータの綿密な収集を行い、修士論文の内容につなげていく。
授業(指導)計画	第1回目～第15回目：先行研究の検討や収集した具体例にもとづいて、指導担当者と討論を行い、修士論文の内容をより妥当性のあるものにしていく。
事前・事後学習課題	事前：文献の渉猟と読み込み、具体例の収集など、修士論文作成に必要な作業を各自で行う(1時間)。 事後：指導担当者との討論を受けて、問題点などを修正する(1時間)。
評価基準	プレゼンテーション 20% レポート 80%
教材等	授業中に指示する。
備考	資料の読み込み、発表の準備などにかかる事前事後の総時間を60時間程度とする。

科目名	欧米言語文化研究総合演習Ⅲ	科目名(英文)	Seminar on Western Languages and Cultures III
配当年次	2年	単位数	2
学期(開講期)	前期	授業担当者	鳥居 祐介

授業(指導)概要・目的	<p>欧米言語文化研究総合演習Ⅰ、Ⅱで行った研究調査をさらに精査し、研究指導計画にもとづいて、修士論文作成の準備に取りかかる。</p> <p>担当教員と討議したスケジュールにもとづいて、計画的に文献の渉猟、データの収集を行いながら、論文の章立てにそって作成にとりかかる。作成の過程で、さらに指導教員との議論を重ねながら、内容をより深めていく。</p>
到達目標	<p>各自の研究テーマにもとづいて、修士論文の具体的な方向性をもつ。</p> <p>論文作成にかかるスケジュールを決め、計画的な執筆ができるようになる。</p> <p>関連する文献の内容を理解できるようになる。</p> <p>修士論文を書き始め、疑問点などを明らかにし、それに自らの解答を準備できるようになる。</p>
授業方法と留意点	<p>先行研究の徹底的な読み込みとデータの綿密な収集を行い、修士論文の内容につなげていく。</p>
授業(指導)計画	<p>第1回目ー第15回目：先行研究の検討や収集した具体例にもとづいて、指導担当者と討論を行い、修士論文の内容をより妥当性のあるものにしていく。</p>
事前・事後学習課題	<p>事前：文献の渉猟と読み込み、具体例の収集など、修士論文作成に必要な作業を各自で行う。</p> <p>事後：指導担当者との討論を受けて、問題点などを修正する。</p>
評価基準	<p>授業中のプレゼンテーション(50%)</p> <p>修士論文の下書きを含めたレポート(50%)</p>
教材等	<p>授業中に指示する。</p>
備考	

科目名	欧米言語文化研究総合演習Ⅲ	科目名(英文)	Seminar on Western Languages and Cultures III
配当年次	2年	単位数	2
学期(開講期)	前期	授業担当者	中島 直嗣

授業(指導)概要・目的	欧米言語文化研究総合演習Ⅰ,Ⅱで行った研究調査をさらに精査し、研究指導計画にもとづいて、修士論文作成の準備に取りかかる。担当教員と討議したスケジュールにもとづいて、計画的に文献の渉猟、データの収集を行いながら、論文の章立てにそって作成にとりかかる。作成の過程で、さらに指導教員との議論を重ねながら、内容をより深めていく。
到達目標	各自の研究テーマに基づいて、修士論文の具体的な方向性について検討し、以下のような点を目標とする。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・論文作成にかかるスケジュールを決め、計画的な執筆ができるようになる。</li> <li>・関連する文献の内容を理解できるようになる。</li> <li>・修士論文を書き始め、疑問点などを明らかにし、それに自らの解答を準備できるようになる。</li> </ul>
授業方法と留意点	先行研究の徹底的な読み込みとデータの綿密な収集を行い、修士論文の内容につなげていく。
授業(指導)計画	第1回～第15回：先行研究の検討や収集した具体例にもとづいて、指導担当者と討論を行い、修士論文の内容をより妥当性のあるものにしていく。
事前・事後学習課題	事前：文献の渉猟と読み込み、具体例の収集など、修士論文作成に必要な作業を各自で行う。 事後：指導担当者和との討論を受けて、問題点などを修正する。
評価基準	授業に取り組む姿勢 50% レポートなどの提出物 50%
教材等	必要に応じて授業中に指示する。
備考	

科目名	欧米言語文化研究総合演習Ⅲ	科目名(英文)	Seminar on Western Languages and Cultures III
配当年次	2年	単位数	2
学期(開講期)	前期	授業担当者	船本 弘史

授業(指導)概要・目的	欧米言語文化研究総合演習Ⅰ、Ⅱで行った研究調査をさらに精査し、研究指導計画にもとづいて、修士論文作成の準備に取りかかる。担当教員と討議したスケジュールにもとづいて、計画的に文献の渉猟し、資料・データの収集を行いながら、論文の章立てにそって作成にとりかかる。作成の過程で、さらに指導教員との議論を重ねながら、内容をより深めていく。
到達目標	(1) 論文作成にかかるスケジュールを決め、計画的な執筆ができる。 (2) 関連する文献の内容を理解できる。 (3) 修士論文をまとめるにあたり、問題点などを明らかにし、解答を導く的確な資料・文献を渉猟できるようになる。
授業方法と留意点	先行研究の徹底的な読み込みとデータの綿密な収集を行い、修士論文の内容につなげていく。
授業(指導)計画	学生の研究テーマに即して、最先端の基礎知識を獲得し、理論に偏らず実証的な研究に取り組めるよう、最適な方法を使って指導する。 第1回：オリエンテーション、今後の方針の確認。 第2回：研究計画テーマの設定および、研究計画の作成。 第3回～第15回：研究計画にそって、文献の渉猟やデータの収集を進める。
事前・事後学習課題	事前：文献の渉猟と読み込み、具体例の収集など、修士論文作成に必要な作業を各自で行う。 事後：指導担当者との討論を受けて、問題点などを修正する。
評価基準	プレゼンテーション 20% レポート 80%
教材等	授業中に指示する
備考	レポート等に関するフィードバックは授業内で行う。資料の読み込み、発表の準備などにかかる事前事後の総時間を60時間程度とする。

科目名	欧米言語文化研究総合演習Ⅳ	科目名 (英文)	Seminar on Western Languages and Cultures IV
配当年次	2年	単位数	2
学期 (開講期)	後期	授業担当者	有馬 善一

授業 (指導) 概要・目的	欧米言語文化研究総合演習 III で行った研究調査をさらに精査し、研究指導計画に基づいて、修士論文を作成し完成させる。
到達目標	修士論文を完成することができる。 修士論文の内容を口頭でわかりやすくプレゼンテーションできるようになる。
授業方法と留意点	中間発表や完成原稿の綿密な検討などを行い、完成度の高い修士論文を執筆する。
授業 (指導) 計画	第1回～第15回：先行研究の検討や収集した具体例にもとづいて、指導担当者と討論を行い、修士論文の内容をより妥当性のあるものにしていく。中間発表、完成原稿の検討を重ねて、修士論文を完成させる。
事前・事後学習課題	事前：文献の渉猟と読み込み、具体例の収集など、修士論文作成に必要な作業を各自で行う。 事後：指導担当者の討論を受けて、問題点などを修正する。
評価基準	修士論文 70% 中間発表 30%
教材等	必要に応じて授業中に指示する。
備考	研究発表に関するフィードバックはその都度行う。

科目名	欧米言語文化研究総合演習Ⅳ	科目名 (英文)	Seminar on Western Languages and Cultures Ⅳ
配当年次	2年	単位数	2
学期 (開講期)	後期	授業担当者	加来 奈奈

授業 (指導) 概要・目的	欧米言語文化研究総合演習 III で行った研究をさらに精査し、研究指導計画にもとづいて、修士論文を作成し完成させる。
到達目標	修士論文の完成する。 修士論文の内容を口頭で分かりやすくプレゼンテーションできるようになる。
授業方法と留意点	中間発表や完成原稿の綿密な検討など行い、完成度の高い修士論文を執筆する。
授業 (指導) 計画	第1回目ー第15回目：先行研究の検討や収集した具体例にもとづいて、指導担当者と討論を行い、修士論文の内容をより妥当性のあるものにしていく。中間発表、完成原稿の検討を重ねて、修士論文を完成させる。
事前・事後学習課題	事前：文献の渉猟と読み込み、具体例の収集など、修士論文作成に必要な作業を各自で行う。 事後：指導担当者との討論を受けて、問題点などを修正する。
評価基準	授業中のプレゼンテーション (20%) 中間発表 (20%) 修士論文 (60%)
教材等	授業中に指示する。
備考	該当者なし

科目名	欧米言語文化研究総合演習Ⅳ	科目名 (英文)	Seminar on Western Languages and Cultures IV
配当年次	2年	単位数	2
学期 (開講期)	後期	授業担当者	柏原 郁子

授業 (指導) 概要・目的	欧米言語文化研究総合演習 III で行った研究調査をさらに精査し、研究指導計画に基づいて、修士論文を作成し完成させる。
到達目標	(1) 修士論文を完成することができる。 (2) 修士論文の内容を口頭でわかりやすくプレゼンテーションできる。
授業方法と留意点	中間発表や完成原稿の綿密な検討・修正などを行い、完成度の高い修士論文を執筆する。
授業 (指導) 計画	第1回～第15回：先行研究の検討や収集した具体例にもとづいて、指導担当者と討論を行い、修士論文の内容をより妥当性のあるものにしていく。中間発表、完成原稿の検討及び修正を重ねて、修士論文を完成させる。
事前・事後学習課題	事前：文献の渉猟と読み込み、具体例の収集など、修士論文作成に必要な作業を各自で行う。 事後：指導担当者との討論を受けて、問題点などを修正する。
評価基準	中間発表 20% 修士論文 80%
教材等	授業中に指示する。
備考	資料の読み込み、発表の準備などにかかる事前事後の総時間を60時間程度とする。

科目名	欧米言語文化研究総合演習Ⅳ	科目名 (英文)	Seminar on Western Languages and Cultures IV
配当年次	2年	単位数	2
学期 (開講期)	後期	授業担当者	後藤 一章

授業 (指導) 概要・目的	欧米言語文化研究総合演習は欧米の地域を中心とした言語・文化・思想・歴史と多岐にわたった領域にまたがっており、各々専門の研究者の指導の下、大学院学生として各自の研究テーマにそった指導を受ける。基礎文献・参考文献等、適切な選択をした上で各自のテーマを自分の視点で論文として完成することを目指す。
到達目標	修士論文を完成させ、口頭試問等の審査に合格できるように準備する。
授業方法と留意点	面談による個別指導となる。修士論文原稿を毎週書き進める。それらに基づいて指導を行う。
授業 (指導) 計画	週一回の面談指導に従い、研究と執筆を進める。
事前・事後学習課題	毎週、少しでも研究、執筆を進めること。
評価基準	70% 修士論文原稿の評価 30% 口頭試問の評価
教材等	個別に指定する。
備考	

科目名	欧米言語文化研究総合演習Ⅳ	科目名 (英文)	Seminar on Western Languages and Cultures IV
配当年次	2年	単位数	2
学期 (開講期)	後期	授業担当者	齋藤 安以子

授業 (指導) 概要・目的	欧米言語文化研究総合演習 III で行った研究調査をさらに精査し、研究指導計画にもとづいて、修士論文を作成し完成させる。
到達目標	修士論文の完成させること
授業方法と留意点	中間発表や完成原稿の綿密な検討など行い、完成度の高い修士論文を執筆する。
授業 (指導) 計画	第1回目～第15回目：先行研究の検討や収集した具体例にもとづいて、指導担当者と討論を行い、修士論文の内容をより妥当性のあるものにしていく。中間発表、完成原稿の検討を重ねて、修士論文を完成させる。
事前・事後学習課題	事前：文献の渉猟と読み込み、具体例の収集など、修士論文作成に必要な作業を各自で行う (1時間)。 事後：指導担当者との討論を受けて、問題点などを修正する (1時間)。
評価基準	中間発表 20% 修士論文 80%
教材等	授業中に指示する。
備考	資料の読み込み、発表の準備などにかかる事前事後の総時間を60時間程度とする。

科目名	欧米言語文化研究総合演習Ⅳ	科目名 (英文)	Seminar on Western Languages and Cultures IV
配当年次	2年	単位数	2
学期 (開講期)	後期	授業担当者	鳥居 祐介

授業 (指導) 概要・目的	欧米言語文化研究総合演習 III で行った研究調査をさらに精査し、研究指導計画にもとづいて、修士論文を作成し完成させる。
到達目標	修士論文を完成させる。 修士論文の内容を口頭で分かりやすくプレゼンテーションできるようになる。
授業方法と留意点	中間発表や完成原稿の綿密な検討など行い、完成度の高い修士論文を執筆する。
授業 (指導) 計画	第1回目ー第15回目：先行研究の検討や収集した具体例にもとづいて、指導担当者と討論を行い、修士論文の内容をより妥当性のあるものにしていく。中間発表、完成原稿の検討を重ねて、修士論文を完成させる。
事前・事後学習課題	事前：文献の渉獵と読み込み、具体例の収集など、修士論文作成に必要な作業を各自で行う。 事後：指導担当者との討論を受けて、問題点などを修正する。
評価基準	授業中のプレゼンテーション (20%) 中間発表 (20%) 修士論文 (60%)
教材等	授業中に指示する。
備考	

科目名	欧米言語文化研究総合演習Ⅳ	科目名 (英文)	Seminar on Western Languages and Cultures IV
配当年次	2年	単位数	2
学期 (開講期)	後期	授業担当者	中島 直嗣

授業 (指導) 概要・目的	欧米言語文化研究総合演習 III で行った研究調査をさらに精査し、研究指導計画に基づいて、修士論文を作成し完成させる。
到達目標	修士論文を完成することができる。 修士論文の内容を口頭でわかりやすくプレゼンテーションできるようになる。
授業方法と留意点	中間発表や完成原稿の綿密な検討などを行い、完成度の高い修士論文を執筆する。
授業 (指導) 計画	第1回～第15回：先行研究の検討や収集した具体例にもとづいて、指導担当者と討論を行い、修士論文の内容をより妥当性のあるものにしていく。中間発表、完成原稿の検討を重ねて、修士論文を完成させる。
事前・事後学習課題	事前：文献の渉猟と読み込み、具体例の収集など、修士論文作成に必要な作業を各自で行う。 事後：指導担当者的との討論を受けて、問題点などを修正する。
評価基準	修士論文 70% 中間発表 30%
教材等	必要に応じて授業中に指示する。
備考	

科目名	欧米言語文化研究総合演習Ⅳ	科目名 (英文)	Seminar on Western Languages and Cultures IV
配当年次	2年	単位数	2
学期 (開講期)	後期	授業担当者	船本 弘史

授業 (指導) 概要・目的	欧米言語文化研究総合演習 III で行った研究調査をさらに精査し、研究指導計画に基づいて、修士論文を作成し完成させる。
到達目標	(1) 修士論文を完成することができる。 (2) 修士論文の内容を口頭でわかりやすくプレゼンテーションできる。
授業方法と留意点	中間発表や完成原稿の綿密な検討・修正などを行い、完成度の高い修士論文を執筆する。
授業 (指導) 計画	第1回～第15回：先行研究の検討や収集した具体例にもとづいて、指導担当者と討論を行い、修士論文の内容をより妥当性のあるものにしていく。中間発表、完成原稿の検討及び修正を重ねて、修士論文を完成させる。
事前・事後学習課題	事前：文献の渉猟と読み込み、具体例の収集など、修士論文作成に必要な作業を各自で行う。 事後：指導担当者ととの討論を受けて、問題点などを修正する。
評価基準	中間発表 20% 修士論文 80%
教材等	授業中に指示する。
備考	研究発表に関するフィードバックは授業内で行う。資料の読み込み、発表の準備などにかかる事前事後の総時間を60時間程度とする。

科目名	アジア言語文化研究総合演習 I	科目名 (英文)	Seminar on Asian Languages and Cultures I
配当年次	1 年	単位数	2
学期 (開講期)	前期	授業担当者	赤澤 春彦

授業 (指導) 概要・目的	各自の研究テーマと研究計画を踏まえ、各自が研究資料の調査・収集等の予備的作業を行なう。なお、本授業では研究倫理についても説明を行なう。
到達目標	研究テーマを明確にし、研究計画を適宜ブラッシュアップしながら、研究遂行に必要な諸技能を修得する。
授業方法と留意点	研究報告 (準備段階における研究相談を含む)・質疑応答・意見交換を行なう。
授業 (指導) 計画	各自のテーマに応じて、研究を進める。
事前・事後学習課題	予習・復習を 60 時間以上すること。
評価基準	研究への取り組みに対する総合評価 (100%)
教材等	適宜指示する。
備考	発表については終了後コメントする。

科目名	アジア言語文化研究総合演習 I	科目名 (英文)	Seminar on Asian Languages and Cultures I
配当年次	1 年	単位数	2
学期 (開講期)	前期	授業担当者	上田 達

授業 (指導) 概要・目的	入学当初に提出した各自の研究テーマと研究計画を踏まえ、指導教員の指導のもとに、各自が研究資料の調査・収集等の予備的作業を行ない、討論・発表を通じて、研究遂行に必要な諸技能を修得する。
到達目標	修士論文作成のための文献資料の理解。 論文作成や資料収集における研究倫理のあり方を理解する。
授業方法と留意点	指導教員の指示に従う。
授業 (指導) 計画	指導教員の指示に従う。
事前・事後学習課題	【事前】 資料収集・論文作成など各自に必要な作業を行う。 【事後】 指導教員に指摘された箇所を検討し修正する。
評価基準	指導教員の指示に従う。
教材等	指導教員の指示による。
備考	【 指導担当者 】 上田達 (研究室 7号館5階)

科目名	アジア言語文化研究総合演習 I	科目名 (英文)	Seminar on Asian Languages and Cultures I
配当年次	1 年	単位数	2
学期 (開講期)	前期	授業担当者	浦野 崇央

授業 (指導) 概要・目的	入学当初に提出した各自の研究テーマと研究計画を踏まえ、各指導教員の指導のもとに研究倫理のあり方を理解し、各自が研究資料の調査・収集等の予備的作業を行ない、討論・発表を通じて、研究遂行に必要な諸技能を修得し、修士論文を作成する。
到達目標	研究計画を立てながら、研究テーマを明確にさせ、研究遂行に必要な技法を修得することができる。
授業方法と留意点	受講生は毎回、成果発表を行い、教員との意見交換を通じて研究を進めていく。受講生には積極性が求められるので、その点を留意すること。
授業 (指導) 計画	基礎的な調査を通じて修士論文の大枠のテーマを設定する。
事前・事後学習課題	取り組むべき作業を進める。 事前・事後学習時間は 60 時間以上とする。
評価基準	研究への取り組み (100%)
教材等	適宜指示する。
備考	

科目名	アジア言語文化研究総合演習 I	科目名 (英文)	Seminar on Asian Languages and Cultures I
配当年次	1年	単位数	2
学期 (開講期)	前期	授業担当者	門脇 薫

授業 (指導) 概要・目的	入学当初に提出した各自の研究テーマと研究計画を踏まえ、各指導教員の指導のもとに研究倫理のあり方を理解し、各自が研究資料の調査・収集等の予備的作業を行ない、討論・発表を通じて、研究遂行に必要な諸技能を修得し、修士論文を作成する。
到達目標	修士論文作成に向けての基礎資料を集められる。 基礎資料を理解できる。
授業方法と留意点	受講者は調査及び考察した内容について発表する。 それについて教員との意見交換を通して研究を進める。
授業 (指導) 計画	基礎的な調査を通じて修士論文の大きなテーマを決める。
事前・事後学習課題	取り組むべき作業を進める。 事前・事後学習時間 60h
評価基準	研究への取り組み (100%)
教材等	資料を配布する
備考	

科目名	アジア言語文化研究総合演習 I	科目名 (英文)	Seminar on Asian Languages and Cultures I
配当年次	1年	単位数	2
学期 (開講期)	前期	授業担当者	田中 悟

授業 (指導) 概要・目的	入学当初に提出した各自の研究テーマと研究計画を踏まえ、各指導教員の指導のもとに研究倫理のあり方を理解し、各自が研究資料の調査・収集等の予備的作業を行ない、討論・発表を通じて、研究遂行に必要な諸技能を修得し、修士論文を作成する。
到達目標	修士論文の作成に向けた準備を行う。
授業方法と留意点	受講者は研究内容をレジュメにまとめ発表する。 質疑応答を行ない、研究を深める。
授業 (指導) 計画	大枠のテーマを設定して、関連論文を講読し、研究史上の問題点を探る。 テーマにかかる資料を収集し、解読、考察を進める。
事前・事後学習課題	事前・事後学習時間60hを目安とし、継続的に研究を進める。
評価基準	報告と年度末レポート
教材等	
備考	

科目名	アジア言語文化研究総合演習 I	科目名 (英文)	Seminar on Asian Languages and Cultures I
配当年次	1 年	単位数	2
学期 (開講期)	前期	授業担当者	橋本 正俊

授業 (指導) 概要・目的	入学当初に提出した各自の研究テーマと研究計画を踏まえ、各指導教員の指導のもとに研究倫理のあり方を理解し、各自が研究資料の調査・収集等の予備的作業を行ない、討論・発表を通じて、研究遂行に必要な諸技能を修得し、修士論文を作成する。
到達目標	研究計画を立てながら、研究テーマを明確にさせ、研究遂行に必要な技法を修得することができる。
授業方法と留意点	受講生は毎回、成果発表を行い、教員との意見交換を通じて研究を進めていく。受講生には積極性が求められるので、その点を留意すること。
授業 (指導) 計画	基礎的な調査を通じて修士論文の大枠のテーマを設定する。
事前・事後学習課題	毎回の課題に取り組む。
評価基準	研究への取り組み (100%)
教材等	適宜指示する。
備考	事前事後学習時間の目安は 60 時間

科目名	アジア言語文化研究総合演習 I	科目名 (英文)	Seminar on Asian Languages and Cultures I
配当年次	1 年	単位数	2
学期 (開講期)	前期	授業担当者	古矢 篤史

授業 (指導) 概要・目的	履修者の研究テーマに則して修士論文を書くための指導を行う。
到達目標	論文ごとに適切な問いを立てることができる。 必要な文献を調査することができる。 問いに即した議論と考察ができ、それらを言語化できる。
授業方法と留意点	研究の進捗に応じて個別に指導する。
授業 (指導) 計画	第 1 回 ガイダンス 第 2 回以降 履修者の研究に対する個別指導
事前・事後学習課題	事前・事後学習時間は 60 時間。研究状況の報告の準備、および報告後の再調査と再検討を行うこと。
評価基準	研究への取り組み (100%)
教材等	
備考	

科目名	アジア言語文化研究総合演習 I	科目名 (英文)	Seminar on Asian Languages and Cultures I
配当年次	1 年	単位数	2
学期 (開講期)	前期	授業担当者	森 類臣

授業 (指導) 概要・目的	1) 入学時に提出した研究テーマと研究計画をふまえて修士論文執筆の基礎を整える。 2) 指導教員の指導の下に従って先行研究の収集と検討、一次資料の収集と分析・研究資料の調査と収集・資料の分析等の作業を進める。研究の進捗状況を報告し、それに対して討論を行うことで研究を深化発展させる。 3) 研究倫理および研究のルールを理解し実践する。
到達目標	1) リサーチクエスチョン (Research Question) の明確化 2) 研究計画の改善 3) 調査・分析を進める上で必要な知識と技法を習得すること。
授業方法と留意点	受講学生は毎回授業時に研究の進捗状況を報告し、教員との対話を通じて研究をブラッシュアップしていくことになる。積極的に取り組むこと。
授業 (指導) 計画	第1回 オリエンテーション 第2～第14回 文献購読・調査および分析方法・討論 第15回 まとめ
事前・事後学習課題	予習・復習は合わせて60時間以上するものとする。
評価基準	研究への取り組みに対する総合評価 (100%)
教材等	授業時等に適宜指示する。
備考	

科目名	アジア言語文化研究総合演習Ⅱ	科目名（英文）	Seminar on Asian Languages and Cultures II
配当年次	1年	単位数	2
学期（開講期）	後期	授業担当者	赤澤 春彦

授業（指導）概要・目的	各自の研究テーマと研究計画を踏まえ、各自が研究資料の調査・収集等の予備的作業を行なう。なお、本授業では研究倫理についても説明を行なう。
到達目標	研究テーマを明確にし、研究計画を適宜ブラッシュアップしながら、研究遂行に必要な諸技能を修得する。
授業方法と留意点	研究報告（準備段階における研究相談を含む）・質疑応答・意見交換を行なう。
授業（指導）計画	各自のテーマに応じて、研究を進める。
事前・事後学習課題	予習・復習を60時間以上すること。
評価基準	研究への取り組みに対する総合評価（100%）
教材等	適宜指示する。
備考	発表については終了後コメントする。

科目名	アジア言語文化研究総合演習Ⅱ	科目名（英文）	Seminar on Asian Languages and Cultures II
配当年次	1年	単位数	2
学期（開講期）	後期	授業担当者	上田 達

授業（指導）概要・目的	総合演習Ⅰをうけて、各自が設定した課題についての調査・研究を継続し、討論・発表等を通じて、より次元の高い研究技法の習得と研究能力の向上に努める。
到達目標	修士論文作成の準備。
授業方法と留意点	各指導教員の指示に従う。
授業（指導）計画	各指導教員の指示に従う。
事前・事後学習課題	【事前】 資料収集・論文作成など各自で必要な作業を行う。 【事後】 指導教員に指摘された箇所を検討し、修正する。
評価基準	各指導教員の指示に従う。
教材等	各指導教員の指示による。
備考	【指導担当者】 上田達 7号館5階

科目名	アジア言語文化研究総合演習Ⅱ	科目名(英文)	Seminar on Asian Languages and Cultures II
配当年次	1年	単位数	2
学期(開講期)	後期	授業担当者	浦野 崇央

授業(指導)概要・目的	入学当初に提出した各自の研究テーマと研究計画を踏まえ、各指導教員の指導のもとに研究倫理のあり方を理解し、各自が研究資料の調査・収集等の予備的作業を行ない、討論・発表を通じて、研究遂行に必要な諸技能を修得し、修士論文を作成する。
到達目標	修士論文作成に向けての調査・資料収集を行うことができる。収集した資料の内容が理解できる。
授業方法と留意点	受講生は毎回、成果発表を行い、教員との意見交換を通じて研究を進めていく。受講生には積極性が求められるので、その点を留意すること。
授業(指導)計画	基礎的な調査を通じて修士論文の大枠のテーマを設定する。
事前・事後学習課題	取り組むべき作業を進める。 事前・事後学習時間は60時間以上とする。
評価基準	研究への取り組み(100%)
教材等	適宜指示する。
備考	

科目名	アジア言語文化研究総合演習Ⅱ	科目名(英文)	Seminar on Asian Languages and Cultures II
配当年次	1年	単位数	2
学期(開講期)	後期	授業担当者	門脇 薫

授業(指導)概要・目的	入学当初に提出した各自の研究テーマと研究計画を踏まえ、各指導教員の指導のもとに研究倫理のあり方を理解し、各自が研究資料の調査・収集等の予備的作業を行ない、討論・発表を通じて、研究遂行に必要な諸技能を修得し、修士論文を作成する。
到達目標	修士論文作成に向けての調査・資料収集ができる。 資料の内容を理解できる。
授業方法と留意点	受講者は調査及び考察した内容について発表する。 それについて教員との意見交換を通して研究を進める。
授業(指導)計画	修士論文のテーマに沿って、調査・資料収集を進める。
事前・事後学習課題	取り組むべき作業を進める。 事前・事後学習時間60h
評価基準	研究への取り組み(100%)
教材等	
備考	

科目名	アジア言語文化研究総合演習Ⅱ	科目名 (英文)	Seminar on Asian Languages and Cultures II
配当年次	1年	単位数	2
学期 (開講期)	後期	授業担当者	田中 悟

授業 (指導) 概要・目的	入学当初に提出した各自の研究テーマと研究計画を踏まえ、各指導教員の指導のもとに研究倫理のあり方を理解し、各自が研究資料の調査・収集等の予備的作業を行ない、討論・発表を通じて、研究遂行に必要な諸技能を修得し、修士論文を作成する。
到達目標	修士論文の作成に向けた準備を行う。
授業方法と留意点	受講者は研究内容をレジュメにまとめ、発表する。 質疑応答を行ない、研究を深める。
授業 (指導) 計画	テーマにかかる資料を収集し、解読、考察を進める。
事前・事後学習課題	事前・事後学習時間60hを目安とし、継続的に研究を進める。
評価基準	報告と年度末レポート
教材等	
備考	

科目名	アジア言語文化研究総合演習Ⅱ	科目名（英文）	Seminar on Asian Languages and Cultures II
配当年次	1年	単位数	2
学期（開講期）	後期	授業担当者	橋本 正俊

授業（指導）概要・目的	入学当初に提出した各自の研究テーマと研究計画を踏まえ、各指導教員の指導のもとに研究倫理のあり方を理解し、各自が研究資料の調査・収集等の予備的作業を行ない、討論・発表を通じて、研究遂行に必要な諸技能を修得し、修士論文を作成する。
到達目標	修士論文作成に向けての調査・資料収集を行うことができる。収集した資料の内容が理解できる。
授業方法と留意点	受講生は毎回、成果発表を行い、教員との意見交換を通じて研究を進めていく。受講生には積極性が求められるので、その点を留意すること。
授業（指導）計画	基礎的な調査を通じて修士論文の大枠のテーマを設定する。
事前・事後学習課題	毎回の課題に取り組む
評価基準	研究への取り組み（100%）
教材等	適宜指示する。
備考	事前事後学習時間の目安は60時間

科目名	アジア言語文化研究総合演習Ⅱ	科目名 (英文)	Seminar on Asian Languages and Cultures II
配当年次	1年	単位数	2
学期 (開講期)	後期	授業担当者	古矢 篤史

授業 (指導) 概要・目的	履修者の研究テーマに則して修士論文を書くための指導を行う。
到達目標	論文ごとに適切な問いを立てることができる。 必要な文献を調査することができる。 問いに即した議論と考察ができ、それらを言語化できる。
授業方法と留意点	研究の進捗に応じて個別に指導する。
授業 (指導) 計画	第1回 ガイダンス 第2回以降 履修者の研究に対する個別指導
事前・事後学習課題	事前・事後学習時間は60時間。研究状況の報告の準備、および報告後の再調査と再検討を行うこと。
評価基準	研究への取り組み (100%)
教材等	
備考	

科目名	アジア言語文化研究総合演習Ⅱ	科目名(英文)	Seminar on Asian Languages and Cultures II
配当年次	1年	単位数	2
学期(開講期)	後期	授業担当者	森 類臣

授業(指導)概要・目的	<ol style="list-style-type: none"> <li>1) 研究テーマと研究計画を深化させて修士論文執筆の基礎を整える。</li> <li>2) 指導教員の指導の下に従って先行研究の収集と検討、一次資料の収集と分析・研究資料の調査と収集・資料の分析等の作業を進める。研究の進捗状況を報告し、それに対して討論してフィードバックするというサイクルを繰り返すことで研究を進展させる。</li> <li>3) 研究倫理および研究のルールを理解し実践する。</li> </ol>
到達目標	<ol style="list-style-type: none"> <li>1) リサーチクエスション(Research Question)の明確化</li> <li>2) 先行研究の検討と位置づけの方法を理解すること。</li> <li>3) 研究計画の改善</li> <li>4) 調査・分析を進める上で必要な知識と技法を習得すること。</li> </ol>
授業方法と留意点	受講学生は毎回授業時に研究の進捗状況を報告し、教員との対話を通じて研究をブラッシュアップしていくことになる。積極的に取り組むこと。
授業(指導)計画	第1回 オリエンテーション 第2～第14回 文献購読・調査および分析方法・討論 第15回 まとめ
事前・事後学習課題	予習・復習は合わせて60時間以上するものとする。
評価基準	研究への取り組みに対する総合評価(100%)
教材等	授業時等に適宜指示する。
備考	

科目名	アジア言語文化研究総合演習Ⅲ	科目名 (英文)	Seminar on Asian Languages and Cultures III
配当年次	2年	単位数	2
学期 (開講期)	前期	授業担当者	赤澤 春彦

授業 (指導) 概要・目的	各自の研究テーマと研究計画を踏まえ、各自が研究資料の調査・収集等の予備的作業を行ない、修士論文の執筆を進める。なお、本授業では研究倫理についても説明を行なう。
到達目標	研究テーマを明確にし、研究計画を適宜ブラッシュアップしながら、研究遂行に必要な諸技能を修得する。また、その成果としての修士論文を完成させる。
授業方法と留意点	研究報告 (準備段階における研究相談を含む)・質疑応答・意見交換を行なう。
授業 (指導) 計画	各自のテーマに応じて研究計画を立て、修士論文の完成を目指して研究を進める。
事前・事後学習課題	予習・復習を60時間以上すること。
評価基準	研究への取り組みに対する総合評価 (100%)
教材等	適宜指示する。
備考	発表については終了後コメントする。

科目名	アジア言語文化研究総合演習Ⅲ	科目名 (英文)	Seminar on Asian Languages and Cultures III
配当年次	2年	単位数	2
学期 (開講期)	前期	授業担当者	上田 達

授業 (指導) 概要・目的	総合演習Ⅰ・Ⅱをうけて、各自が設定した課題についての調査・研究を深め、各指導教員の指導のもとに、修士論文を作成する。
到達目標	修士論文の作成。
授業方法と留意点	各指導教員の指示に従う。
授業 (指導) 計画	各指導教員の指示に従う。
事前・事後学習課題	【事前】 資料収集・論文作成など各自で必要な作業を行う。 【事後】 指導教員に指摘された箇所を検討し、修正する。
評価基準	各指導教員の指示に従う。
教材等	各指導教員の指示による。
備考	【 指導担当者 】 上田達 7号館5階

科目名	アジア言語文化研究総合演習Ⅲ	科目名 (英文)	Seminar on Asian Languages and Cultures III
配当年次	2年	単位数	2
学期 (開講期)	前期	授業担当者	浦野 崇央

授業 (指導) 概要・目的	入学当初に提出した各自の研究テーマと研究計画を踏まえ、各指導教員の指導のもとに研究倫理のあり方を理解し、各自が研究資料の調査・収集等の予備的作業を行ない、討論・発表を通じて、研究遂行に必要な諸技能を修得し、修士論文を作成する。
到達目標	修士論文作成に向けての資料収集・調査を行い、論文執筆を進めることができる。
授業方法と留意点	各自のテーマに応じて異なるが、指導教員との意見交換を通じて論文執筆を進めていく。
授業 (指導) 計画	修士論文のテーマに沿って、資料収集・調査を進めつつ、論文を執筆する。
事前・事後学習課題	取り組むべき作業を進める。 事前・事後学習時間は、60時間以上とする。
評価基準	研究への取り組み (100%)
教材等	
備考	

科目名	アジア言語文化研究総合演習Ⅲ	科目名 (英文)	Seminar on Asian Languages and Cultures III
配当年次	2年	単位数	2
学期 (開講期)	前期	授業担当者	門脇 薫

授業 (指導) 概要・目的	入学当初に提出した各自の研究テーマと研究計画を踏まえ、各指導教員の指導のもとに研究倫理のあり方を理解し、各自が研究資料の調査・収集等の予備的作業を行ない、討論・発表を通じて、研究遂行に必要な諸技能を修得し、修士論文を作成する。
到達目標	修士論文作成に向けての調査・資料収集を行い、論文執筆を進められる。
授業方法と留意点	受講者は調査及び考察した内容について発表する。 それについて教員との意見交換を通して研究を進める。
授業 (指導) 計画	修士論文のテーマに沿って、調査・資料収集を進め、論文を執筆する。
事前・事後学習課題	取り組むべき作業を進める。 事前・事後学習時間 60 h
評価基準	研究への取り組み (100%)
教材等	
備考	

科目名	アジア言語文化研究総合演習Ⅲ	科目名 (英文)	Seminar on Asian Languages and Cultures III
配当年次	2年	単位数	2
学期 (開講期)	前期	授業担当者	田中 悟

授業 (指導) 概要・目的	入学当初に提出した各自の研究テーマと研究計画を踏まえ、各指導教員の指導のもとに研究倫理のあり方を理解し、各自が研究資料の調査・収集等の予備的作業を行ない、討論・発表を通じて、研究遂行に必要な諸技能を修得し、修士論文を作成する。
到達目標	修士論文の作成に向けた準備を行なう。
授業方法と留意点	受講者は研究内容をレジュメにまとめ発表する。 質疑応答を行ない、研究を深める。
授業 (指導) 計画	テーマにかかる資料を収集し、解読、考察を進めて、随時研究相談を実施する。
事前・事後学習課題	事前・事後学習時間60hを目安とし、継続的に研究を進める。
評価基準	報告と年度末レポート
教材等	
備考	

科目名	アジア言語文化研究総合演習Ⅲ	科目名 (英文)	Seminar on Asian Languages and Cultures III
配当年次	2年	単位数	2
学期 (開講期)	前期	授業担当者	橋本 正俊

授業 (指導) 概要・目的	入学当初に提出した各自の研究テーマと研究計画を踏まえ、各指導教員の指導のもとに研究倫理のあり方を理解し、各自が研究資料の調査・収集等の予備的作業を行ない、討論・発表を通じて、研究遂行に必要な諸技能を修得し、修士論文を作成する。
到達目標	修士論文作成に向けての資料収集・調査を行い、論文執筆を進めることができる。
授業方法と留意点	各自のテーマに応じて異なるが、指導教員との意見交換を通じて論文執筆を進めていく。
授業 (指導) 計画	修士論文のテーマに沿って、資料収集・調査を進めつつ、論文を執筆する。
事前・事後学習課題	毎回の課題に取り組む。
評価基準	研究への取り組み (100%)
教材等	
備考	事前事後学修時間の目安は60時間

科目名	アジア言語文化研究総合演習Ⅲ	科目名 (英文)	Seminar on Asian Languages and Cultures III
配当年次	2年	単位数	2
学期 (開講期)	前期	授業担当者	古矢 篤史

授業 (指導) 概要・目的	履修者の研究テーマに即して修士論文を書くための指導を行う。
到達目標	論文ごとに適切な問いを立てることができる。 必要な文献を調査することができる。 問いに即した議論と考察ができ、それらを言語化できる。
授業方法と留意点	研究の進捗に応じて個別に指導する。
授業 (指導) 計画	第1回 ガイダンス 第2回以降 履修者の研究に対する個別指導
事前・事後学習課題	事前・事後学習時間は60時間。研究状況の報告の準備、および報告後の再調査と再検討を行うこと。
評価基準	研究への取り組み (100%)
教材等	
備考	

科目名	アジア言語文化研究総合演習Ⅲ	科目名 (英文)	Seminar on Asian Languages and Cultures III
配当年次	2年	単位数	2
学期 (開講期)	前期	授業担当者	森 類臣

授業 (指導) 概要・目的	1) 総合演習Ⅰ・Ⅱで習得した基礎の上に、修士論文を70%程度仕上げられるように執筆していく。 2) 指導教員の指導に従って先行研究の収集と検討、一次資料の収集と分析・研究資料の調査と収集・資料の分析等の作業を進める。 3) 研究の進捗状況を授業で報告し、それに対して討論してフィードバックすることを繰り返す。このサイクルによって研究を発展させる。
到達目標	1) 修士論文の基本的な構造を組み立て、全体の70%程度を執筆すること。 2) 調査・分析を進める上で必要な知識と技法を習得すること。
授業方法と留意点	受講学生は毎回授業時に研究の進捗状況を報告し、教員との対話を通じて研究をブラッシュアップしていくことになる。積極的に取り組むこと。
授業 (指導) 計画	第1回 オリエンテーション 第2～第14回 文献講読・調査および分析方法・討論 第15回 まとめ
事前・事後学習課題	予習・復習は合わせて60時間以上するものとする。
評価基準	研究への取り組みに対する総合評価 (100%)
教材等	授業時等に適宜指示する。
備考	

科目名	アジア言語文化研究総合演習Ⅳ	科目名 (英文)	Seminar on Asian Languages and Cultures IV
配当年次	2年	単位数	2
学期 (開講期)	後期	授業担当者	赤澤 春彦

授業 (指導) 概要・目的	各自の研究テーマと研究計画を踏まえ、各自が研究資料の調査・収集等の予備的作業を行ない、修士論文を完成させる。なお、本授業では研究倫理についても説明を行なう。
到達目標	研究テーマを明確にし、研究計画を適宜ブラッシュアップしながら、研究遂行に必要な諸技能を修得する。また、その成果としての修士論文を完成させる。
授業方法と留意点	研究報告 (準備段階における研究相談を含む)・質疑応答・意見交換を行なう。
授業 (指導) 計画	各自のテーマに応じて研究計画を立て、修士論文の完成を目指して研究を進める。
事前・事後学習課題	予習・復習を60時間以上すること。
評価基準	修士論文 (100%)
教材等	適宜指示する。
備考	発表については終了後コメントする。

科目名	アジア言語文化研究総合演習Ⅳ	科目名 (英文)	Seminar on Asian Languages and Cultures IV
配当年次	2年	単位数	2
学期 (開講期)	後期	授業担当者	上田 達

授業 (指導) 概要・目的	総合演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲにもとづき、各自が設定した課題についての集大成として、各指導教員の指導のもとに、修士論文を完成させる。
到達目標	修士論文の完成。
授業方法と留意点	各指導教員の指示に従う。
授業 (指導) 計画	各指導教員の指示に従う。
事前・事後学習課題	【事前】 資料収集・論文作成など各自で必要な作業を行う。 【事後】 指導教員に指摘された箇所を検討し、修正する。
評価基準	各指導教員の指示に従う。
教材等	各指導教員の指示による。
備考	【指導担当者】 上田達 7号館5階

科目名	アジア言語文化研究総合演習Ⅳ	科目名 (英文)	Seminar on Asian Languages and Cultures IV
配当年次	2年	単位数	2
学期 (開講期)	後期	授業担当者	浦野 崇央

授業 (指導) 概要・目的	入学当初に提出した各自の研究テーマと研究計画を踏まえ、各指導教員の指導のもとに研究倫理のあり方を理解し、各自が研究資料の調査・収集等の予備的作業を行ない、討論・発表を通じて、研究遂行に必要な諸技能を修得し、修士論文を完成させる。
到達目標	修士論文を完成させることができる。
授業方法と留意点	受講生は修士論文の執筆を進め、それに対して指導する。
授業 (指導) 計画	これまでに収集した資料や調査成果をもとに、修士論文を完成させる。
事前・事後学習課題	取り組むべき作業を進める。 事前・事後学習時間は60時間以上を目安とし、継続的に論文執筆を進める。
評価基準	修士論文の完成度 (100%)
教材等	
備考	

科目名	アジア言語文化研究総合演習Ⅳ	科目名 (英文)	Seminar on Asian Languages and Cultures IV
配当年次	2年	単位数	2
学期 (開講期)	後期	授業担当者	門脇 薫

授業 (指導) 概要・目的	入学当初に提出した各自の研究テーマと研究計画を踏まえ、各指導教員の指導のもとに研究倫理のあり方を理解し、各自が研究資料の調査・収集等の予備的作業を行ない、討論・発表を通じて、研究遂行に必要な諸技能を修得し、修士論文を完成させる。
到達目標	修士論文を完成できる。
授業方法と留意点	受講者は調査及び考察した内容について発表する。 それについて教員との意見交換を通して研究を進める。
授業 (指導) 計画	修士論文のテーマに沿って、調査・資料収集を進め、論文を完成させる。
事前・事後学習課題	取り組むべき作業を進める。 事前・事後学習時間 60 h
評価基準	研究への取り組み、修士論文の完成度 (100%)
教材等	
備考	

科目名	アジア言語文化研究総合演習Ⅳ	科目名 (英文)	Seminar on Asian Languages and Cultures IV
配当年次	2年	単位数	2
学期 (開講期)	後期	授業担当者	田中 悟

授業 (指導) 概要・目的	入学当初に提出した各自の研究テーマと研究計画を踏まえ、各指導教員の指導のもとに研究倫理のあり方を理解し、各自が研究資料の調査・収集等の予備的作業を行ない、討論・発表を通じて、研究遂行に必要な諸技能を修得し、修士論文を作成する。
到達目標	修士論文を執筆する。
授業方法と留意点	受講者は修士論文の執筆を進め、教員はそれに対して指導を行なう。
授業 (指導) 計画	受講者は修士論文の執筆を進め、教員はそれに対して指導を行なう。
事前・事後学習課題	事前・事後学習時間60hを目安とし、継続的に論文を執筆する。
評価基準	修士論文
教材等	
備考	

科目名	アジア言語文化研究総合演習Ⅳ	科目名 (英文)	Seminar on Asian Languages and Cultures IV
配当年次	2年	単位数	2
学期 (開講期)	後期	授業担当者	橋本 正俊

授業 (指導) 概要・目的	入学当初に提出した各自の研究テーマと研究計画を踏まえ、各指導教員の指導のもとに研究倫理のあり方を理解し、各自が研究資料の調査・収集等の予備的作業を行ない、討論・発表を通じて、研究遂行に必要な諸技能を修得し、修士論文を完成させる。
到達目標	修士論文を完成させることができる。
授業方法と留意点	受講生は修士論文の執筆を進め、それに対して指導する。
授業 (指導) 計画	これまでに収集した資料や調査成果をもとに、修士論文を完成させる。
事前・事後学習課題	毎回の課題に取り組む。 継続的に論文執筆を進める。
評価基準	授業での取り組み (40%)、修士論文の完成度 (60%)
教材等	
備考	事前事後学習時間の目安は 60 時間

科目名	アジア言語文化研究総合演習IV	科目名 (英文)	Seminar on Asian Languages and Cultures IV
配当年次	2年	単位数	2
学期 (開講期)	後期	授業担当者	古矢 篤史

授業 (指導) 概要・目的	履修者の研究テーマに即して修士論文を書くための指導を行う。
到達目標	論文ごとに適切な問いを立てることができる。 必要な文献を調査することができる。 問いに即した議論と考察ができ、それらを言語化できる。
授業方法と留意点	研究の進捗に応じて個別に指導する。
授業 (指導) 計画	第1回 ガイダンス 第2回以降 履修者の研究に対する個別指導
事前・事後学習課題	事前・事後学習時間は60時間。研究状況の報告の準備、および報告後の再調査と再検討を行うこと。
評価基準	研究への取り組み (100%)
教材等	
備考	

科目名	アジア言語文化研究総合演習Ⅳ	科目名 (英文)	Seminar on Asian Languages and Cultures IV
配当年次	2年	単位数	2
学期 (開講期)	後期	授業担当者	森 類臣

授業 (指導) 概要・目的	1) 修士論文を完成させる。 2) 指導教員の指導に従って先行研究の収集と検討、一次資料の収集と分析・研究資料の調査と収集・資料の分析等の作業を進める。 3) 研究の進捗状況を授業で報告し、それに対して討論してフィードバックすることを繰り返す。このサイクルによって研究を発展させる。
到達目標	1) 修士論文を完成させること。 2) 調査および分析を進める上で必要な知識と技法を習得すること。
授業方法と留意点	受講学生は毎回授業時に研究の進捗状況を報告し、教員との対話を通じて研究をブラッシュアップしていくことになる。積極的に取り組むこと。
授業 (指導) 計画	第1回 オリエンテーション 第2～第14回 文献講読・調査および分析方法・討論 第15回 まとめ
事前・事後学習課題	予習・復習は合わせて60時間以上するものとする。
評価基準	研究への取り組みに対する総合評価 (100%)
教材等	授業時等に適宜指示する。
備考	

科目名	上級英語 I	科目名 (英文)	Advanced English I
配当年次	1 年	単位数	1
学期 (開講期)	前期	授業担当者	鳥居 祐介

授業 (指導) 概要・目的	英語による研究資料や論文の読解、および論文執筆の実践演習を行う。
到達目標	英語による修士論文の作成に必要な英語力を養う。
授業方法と留意点	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 担当教員の指導可能な分野と、受講生の専攻分野やテーマが重なる英語文献を学期の序盤にリストアップし、英作文の指導やディスカッションを行いながら読み進める。学期終盤には小論文を作成する。</li> <li>・ この授業の担当教員の専攻はアメリカ研究(American Studies)であり、英語指導が可能な分野は主として北米地域研究、あるいは文化研究一般となる。受講を検討する学生は、自分の研究関心、専攻分野や研究テーマと教員の指導分野に関連があるかどうかを、あらかじめ相談して確認しておくこと。</li> </ul>
授業 (指導) 計画	初回授業において、担当教員の指導可能な分野と受講生のニーズが合致する英語文献のリストアップを行い、リーディングリストを作成する。第二回以降は、リストに従ったリーディングと、リーディングに基づいたライティングの演習またはディスカッションを行う。学期末には小論文を作成し、提出する。リーディングリストは随時改定する。
事前・事後学習課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 毎回、指定のリーディングについての疑問やコメントを用意して授業に臨むこと。</li> <li>・ リーディングに基づいた英作文等の与えられた課題をスケジュール通りに提出すること。</li> </ul>
評価基準	平常評価 70% + 学期末に提出する小論文 30%
教材等	初回授業で選定する
備考	研究室は 7 号館 3 階

科目名	上級英語Ⅱ	科目名 (英文)	Advanced English II
配当年次	1年	単位数	1
学期 (開講期)	後期	授業担当者	鳥居 祐介

授業 (指導) 概要・目的	英語による研究資料や論文の読解、および論文執筆の実践演習を行う。
到達目標	英語による修士論文の作成に必要な英語力を養う。
授業方法と留意点	<ul style="list-style-type: none"> <li>・担当教員の指導可能な分野と、受講生の専攻分野やテーマが重なる英語文献を学期の序盤にリストアップし、英作文の指導やディスカッションを行いながら読み進める。学期終盤には小論文を作成する。</li> <li>・この授業の担当教員の専攻はアメリカ研究(American Studies)であり、英語指導が可能な分野は主として北米地域研究、あるいは文化研究一般となる。受講を検討する学生は、自分の研究関心、専攻分野や研究テーマと教員の指導分野に関連があるかどうかを、あらかじめ相談して確認しておくこと。</li> </ul>
授業 (指導) 計画	初回授業において、担当教員の指導可能な分野と受講生のニーズが合致する英語文献のリストアップを行い、リーディングリストを作成する。第二回以降は、リストに従ったリーディングと、リーディングに基づいたライティングの演習またはディスカッションを行う。学期末には小論文を作成し、提出する。リーディングリストは随時改定する。
事前・事後学習課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・毎回、指定のリーディングについての疑問やコメントを用意して授業に臨むこと。</li> <li>・リーディングに基づいた英作文等の与えられた課題をスケジュール通りに提出すること。</li> </ul>
評価基準	平常評価 70% + 学期末に提出する小論文 30%
教材等	初回授業で選定する
備考	研究室は7号館3階

科目名	上級中国語 I	科目名 (英文)	Advanced Chinese I
配当年次	1 年	単位数	1
学期 (開講期)	前期	授業担当者	中西 正樹

授業 (指導) 概要・目的	時事問題を中国語で読み解くことを目的とする。授業では『朝日新聞』やNHKの国際放送「NHK WORLD-JAPAN」から適当な記事を取り上げて、その要約や言い換えを主なタスクとしながら、トピックごとにプレゼンテーションを行う。適宜中国や台湾などの中国語メディアの記事も取り上げて、日本と中国、台湾のメディアにおける視点の違いについても議論を行う。
到達目標	時事的な内容の中国語文を読んで、それを簡潔な中国語文で要約することができる。また、その政治的または文化的な背景および歴史や地理的な問題と関連付けながら議論することができる。また、研究テーマとの関わりについて説明することができる。
授業方法と留意点	演習形式で授業をすすめる。
授業 (指導) 計画	下記の作業を基本的に3週サイクルで繰り返す。 1. 学生自身がトピックを提案し、教員と相談しながら決定し、図書館またはWebで閲覧できる記事を教員と共有する。次回の授業までにそれを閲読し、内容を理解しておく。 2. 中国語での要約を発表するとともに、関連する他の資料を取り上げながらプレゼンテーションの構成を考える。次回の授業までにプレゼン資料を完成させる。 3. プレゼンを行うとともに研究テーマとの関わりを念頭に置きながら議論を行う。授業後には次回授業までに1の準備をしておく。  学期末
事前・事後学習課題	目安として、約1時間の事前学習および1時間の事後学習を必要とする。
評価基準	授業への参加度 20% プレゼンテーション 50% レポート 30%
教材等	プリントやデータを適宜配布する
備考	

科目名	上級中国語Ⅱ	科目名(英文)	Advanced Chinese II
配当年次	1年	単位数	1
学期(開講期)	後期	授業担当者	中西 正樹

授業(指導)概要・目的	時事問題を中国語で読み解くことを目的とする。授業では『朝日新聞』やNHKの国際放送「NHK WORLD-JAPAN」から適当な記事を取り上げて、その要約や言い換えを主なタスクとしながら、トピックごとにプレゼンテーションを行う。適宜中国や台湾などの中国語メディアの記事も取り上げて、日本と中国、台湾のメディアにおける視点の違いについても議論を行う。
到達目標	時事的な内容の中国語文を読んで、それを簡潔な中国語文で要約することができる。また、その政治的または文化的な背景および歴史や地理的な問題と関連付けながら議論することができる。また、研究テーマとの関わりについて説明することができる。
授業方法と留意点	演習形式で授業をすすめる。
授業(指導)計画	下記の作業を基本的に3週のサイクルで繰り返す。 1. 学生自身がトピックを提案し、教員と相談しながら決定し、図書館またはWebで閲覧できる記事を教員と共有する。次回の授業までにそれを閲読し、内容を理解しておく。 2. 中国語での要約を発表するとともに、関連する他の資料を取り上げながらプレゼンテーションの構成を考える。次回の授業までにプレゼン資料を完成させる。 3. プレゼンを行うとともに研究テーマとの関わりを念頭に置きながら議論を行う。授業後には次回授業までに1の準備をしておく。  学期末
事前・事後学習課題	目安として、約1時間の事前学習および1時間の事後学習を必要とする。
評価基準	授業への参加度 20% プレゼンテーション 50% レポート 30%
教材等	プリントやデータを適宜配布する
備考	

科目名	上級スペイン語 I	科目名 (英文)	Advanced Spanish I
配当年次	1 年	単位数	1
学期 (開講期)	前期	授業担当者	藤井 嘉祥

授業 (指導) 概要・目的	スペイン語で書かれた論文を読み、論理の流れ、論証の仕方を学ぶ。学術論文に特有の言い回しにも慣れるよう指導する。
到達目標	専門的な学術論文を読み解けるようになる。
授業方法と留意点	一文ずつ細かく読み、ニュアンスの違いをつかむとともに、パラグラフごと、章ごと、全体の把握ができるようにする。
授業 (指導) 計画	受講生の関心にしたがい、読むべき先行研究を探す方法の紹介から始める。 前期はとにかく詳細な読みに徹する。
事前・事後学習課題	進む範囲を決めておくので、その部分に関しては訳すだけでなく、何を聞かれても自分の意見が言えるようにしておく。 事前事後学習に要する総時間数は約 60 時間を目安とする。
評価基準	文献読解の取り組み (20%) およびスペイン語と日本語両言語での文章構成の精度 (80%) をもとに総合的に評価する。
教材等	受講生の研究テーマに即して選定する。
備考	

科目名	上級スペイン語Ⅱ	科目名(英文)	Advanced Spanish II
配当年次	1年	単位数	1
学期(開講期)	後期	授業担当者	藤井 嘉祥

授業(指導)概要・目的	スペイン語で書かれた論文を読み、論理の流れ、論証の仕方を学びつつ、学術論文に特有の言い回しにも慣れるよう指導する。
到達目標	専門的な学術論文を読み解けるようになる。
授業方法と留意点	一文ずつ細かく読み、ニュアンスの違いをつかむとともに、パラグラフごと、章ごと、全体の把握ができるようにする。
授業(指導)計画	受講生の関心にしたがってスペイン語で書かれた基本文献を選定し読み進める。 後期は詳細な読みに加え、全体を見回せる目も養う。
事前・事後学習課題	進む範囲を決めておくので、その部分に関しては訳すだけでなく、何を聞かれても自分の意見が言えるようにしておく。 事前・事後学習に要する総時間数は約60時間を目安とする。
評価基準	文献読解の取り組み(20%)およびスペイン語と日本語両言語での文章構成の精度(80%)をもとに総合的に評価する。
教材等	受講生の研究テーマに即して選定する。
備考	

科目名	上級インドネシア・マレー語 I	科目名 (英文)	Advanced Indonesian and Malay I
配当年次	1 年	単位数	1
学期 (開講期)	前期	授業担当者	上田 達

授業 (指導) 概要・目的	インドネシア、マレーシア、ブルネイ、シンガポール、東ティモール等で使われているインドネシア・マレー語は、国語・公用語として用いている人口が中国語、スペイン語、英語について世界第四位である。この授業ではインドネシア・マレー語の基本を身につけた上で、高度な運用ができることを目指す。
到達目標	インドネシア・マレー語の基本を踏まえた上で、高度な運用が身につく。
授業方法と留意点	特にマレー語で書かれた教材を用いて、講読力を身につけるように指導する。
授業 (指導) 計画	先ずインドネシア・マレー語の基本文法、発音、綴り等の基本を身につける。さらにマレー語文献の講読を通して高度な読解力を習得する。
事前・事後学習課題	語学力の向上には予習・復習は欠かせない。毎回指示された予習を行った上で授業に出ること。また、授業内容についての復習を怠らないこと。
評価基準	課題や授業への取り組みなど (40%) と、二度に分けて行う論述試験 (60%) から総合的に判断する。
教材等	適宜指示する。
備考	

科目名	上級インドネシア・マレー語 I	科目名 (英文)	Advanced Indonesian and Malay I
配当年次	1 年	単位数	1
学期 (開講期)	前期	授業担当者	浦野 崇央

授業 (指導) 概要・目的	インドネシア、マレーシア、ブルネイ、シンガポール、東ティモール等で使われているインドネシア・マレー語は、国語・公用語として用いている人口が中国語、スペイン語、英語について世界第四位である。この授業ではインドネシア・マレー語の基本を身につけた上で、高度な運用ができることを目指す。
到達目標	インドネシア・マレー語の基本を踏まえた上で、高度な運用能力が身につく。
授業方法と留意点	毎回プリントを配布するので、次回までに予習をこなしておくこと。 毎回の授業には辞書を必ず携行すること。
授業 (指導) 計画	まず、インドネシア語の基本文法、発音、綴り等の基本を身につける。さらに講読を通して高度な読解力を習得する。
事前・事後学習課題	語学力の向上には予習・復習は欠かせない。毎回指示された予習を行った上で授業に出席すること。また、授業内容についての復習を怠らないこと。 ★事前・事後学習の総時間数は 15 時間程度を目安とする★
評価基準	毎週の課題の取り組み姿勢 100%
教材等	プリントを配布する。
備考	

科目名	上級インドネシア・マレー語Ⅱ	科目名 (英文)	Advanced Indonesian and Malay II
配当年次	1年	単位数	1
学期 (開講期)	後期	授業担当者	上田 達

授業 (指導) 概要・目的	インドネシア、マレーシア、ブルネイ、シンガポール、東ティモール等で使われているインドネシア・マレー語は、国語・公用語として用いている人口が中国語、スペイン語、英語について世界第四位である。この授業ではインドネシア・マレー語の高度で実的な運用ができることを目指す。
到達目標	インドネシア・マレー語の原書の講読、論文の作成、プレゼンテーション能力を習得できる。
授業方法と留意点	マレー語で書かれた文献の講読を行い、さらに論文の作成を行う。講読、論文作成で養った能力をもとにプレゼンテーションを行う。
授業 (指導) 計画	インドネシア・マレー語の原書の講読を行う。論文作成の基本を指導し、実際に論文を作成する。テーマを決め、プレゼンテーションを行う。
事前・事後学習課題	語学力の向上には予習・復習は欠かせない。毎回指示された予習を行った上で授業に出ること。また、授業内容についての復習を怠らないこと。
評価基準	平常点を含め、総合的に判断する。
教材等	適宜指示する。
備考	

科目名	上級インドネシア・マレー語Ⅱ	科目名 (英文)	Advanced Indonesian and Malay II
配当年次	1年	単位数	1
学期 (開講期)	後期	授業担当者	浦野 崇央

授業 (指導) 概要・目的	インドネシア、マレーシア、ブルネイ、シンガポール、東ティモール等で使われているインドネシア・マレー語は、国語・公用語として用いている人口が中国語、スペイン語、英語について世界第四位である。この授業ではインドネシア語の高度で実践的な運用ができることを目指す。
到達目標	インドネシア語の原書の内容理解が進み、修士論文の作成の足がかりとなる。
授業方法と留意点	インドネシア語原書の講読を行い、論文独自の文体をマスターする。 毎回の授業には辞書を必ず携行すること。
授業 (指導) 計画	インドネシア語の文法を踏まえたうえで、インドネシア語原書の講読を行い、さらに高度な読解力を習得する。
事前・事後学習課題	語学力の向上には予習・復習は欠かせない。毎回指示された予習を行った上で授業に出ること。また、授業内容についての復習を怠らないこと。 ★事前・事後学習の総時間数は15時間程度を目安とする★
評価基準	毎週の課題等の積極的な取り組み姿勢 100%
教材等	プリントを配布する。
備考	

科目名	国際政治特論 I	科目名 (英文)	Topics in International Politics I
配当年次	1 年	単位数	2
学期 (開講期)	前期	授業担当者	田中 悟

授業 (指導) 概要・目的	「私たち」にとって、「他者」とは、どのような存在であるのだろうか。私たちは、「私たちの国」の外側で暮らす「彼ら」と、どのように向き合うことができるのだろうか。本講義は、最も近い隣国としての韓国を導入事例として取り上げ、「他者」について国際政治の観点から考えるためのきっかけを提供する。
到達目標	国際政治 (学) についての認識視座を獲得するとともに、先達の議論を踏まえつつ、自らの関心に沿った研究テーマを設定することを目指す。
授業方法と留意点	講義の導入部では教員から話題の提供を行なうが、その後は自らの関心に基づいて文献資料をピックアップし、個人報告を行なう。この個人報告が、成績評価のための必要条件となる。
授業 (指導) 計画	<p>■導入部では、以下のテーマに基づいて導入講義を行なう。</p> <p>(1) 朝鮮半島を見る見方 朝鮮半島に対する自らの見方について、改めて考えてみる。</p> <p>(2) 現代韓国社会の理解 現代韓国を理解するための視座について考えていく。</p> <p>(3) 韓国現代史の理解 韓国の現代史についていかに理解していくか。一つの叙述を追いながら考えていく。</p> <p>■その後、次のような形式で個人報告を進めていく。</p> <p>(1) 文献紹介と書評 出席者が各人の関心に基づいて選択した文献について、内容紹介および書評を行なって、全員での議論を通して理解を深</p>
事前・事後学習課題	<p>[事前学習] 指定された文献については講義前に目を通し、要点・疑問点についてはメモにまとめておく。</p> <p>[事後学習] 授業内容を自らの研究計画に反映させ、恒常的にブラッシュアップを進める。</p> <p>本講義における学習時間の総計は、60 時間を目安とする。</p>
評価基準	<p>【成績評価の方法】</p> <p>講義への参加状況および個人報告をもとに、総合的に評価する。</p>
教材等	
備考	

科目名	国際政治特論Ⅱ	科目名(英文)	Topics in International Politics II
配当年次	1年	単位数	2
学期(開講期)	後期	授業担当者	田中 悟

授業(指導)概要・目的	「私たち」にとって、「他者」とは、どのような存在であるのだろうか。私たちは、「私たちの国」の外側で暮らす「彼ら」と、どのように向き合うことができるのだろうか。本講義は、最も近い隣国としての韓国を導入事例として取り上げ、「他者」について国際政治の観点から考えるためのきっかけを提供する。
到達目標	国際政治(学)についての認識視座を獲得するとともに、先達の議論を踏まえつつ、自らの関心に沿った研究テーマを設定することを目指す。
授業方法と留意点	講義の導入部では教員から話題の提供を行なうが、その後は自らの関心に基づいて文献資料をピックアップし、個人報告を行なう。この個人報告が、成績評価のための必要条件となる。
授業(指導)計画	<p>■導入部では、以下のテーマに基づいて導入講義を行なう。</p> <p>(1) 朝鮮半島を見る見方 朝鮮半島に対する自らの見方について、改めて考えてみる。</p> <p>(2) 現代韓国社会の理解 現代韓国を理解するための視座について考えていく。</p> <p>(3) 韓国現代史の理解 韓国の現代史についていかに理解していくか。一つの叙述を追いながら考えていく。</p> <p>■その後、次のような形式で個人報告を進めていく。</p> <p>(1) 文献紹介と書評 出席者が各人の関心に基づいて選択した文献について、内容紹介および書評を行なって、全員での議論を通して理解を深</p>
事前・事後学習課題	<p>[事前学習] 指定された文献については講義前に目を通し、要点・疑問点についてはメモにまとめておく。</p> <p>[事後学習] 授業内容を自らの研究計画に反映させ、恒常的にブラッシュアップを進める。</p> <p>本講義における学習時間の総計は、60時間を目安とする。</p>
評価基準	<p>【成績評価の方法】</p> <p>講義への参加状況および個人報告をもとに、総合的に評価する。</p>
教材等	
備考	

科目名	国際経済特論 I	科目名 (英文)	Topics in International Economy I
配当年次	1 年	単位数	2
学期 (開講期)	前期	授業担当者	杉本 篤信

授業 (指導) 概要・目的	国際マクロ経済学、国際金融論に関する講義を行う。経済理論は、現実を抽象化し、規則性を抽出するものである。しかし、現実の制度、政策に関する知識が不可欠になる。そのためには、現実の国際経済に関するデータ、情報を入手することが大事になるので、その方法も説明する。講義中に扱う主なトピックは為替レートの決定理論、経常収支、貿易収支の理論、金融・財政政策と為替政策との関連になる。
到達目標	1. 国際金融、為替レート、国際マクロ経済学 k の理論を理解する (DP3) 2. 国際金融や国際経済に関するデータを入手し、分析するスキルを身に付ける (DP3)
授業方法と留意点	テキストに従った講義形式。必要に応じてプリントなどを配布。
授業 (指導) 計画	教材の内容の解説とディスカッション。
事前・事後学習課題	講義中に指示下教材の予習をしておくこと。適宜内容を理解度を確保するためレポートなどを提出してもらう。
評価基準	講義中の発言、提出物で評価する。
教材等	講義中指定
備考	

科目名	国際経済特論Ⅱ	科目名(英文)	Topics in International Economy II
配当年次	1年	単位数	2
学期(開講期)	後期	授業担当者	杉本 篤信

授業(指導)概要・目的	国際マクロ経済学、国際金融論に関する講義を行う。経済理論は、現実を抽象化し、規則性を抽出するものである。しかし、現実の制度、政策に関する知識が不可欠になる。そのためには、現実の国際経済に関するデータ、情報を入手することが大事になるので、その方法も説明する。講義中に扱う主なトピックは為替レートの決定理論、経常収支、貿易収支の理論、金融・財政政策と為替政策との関連になる。
到達目標	1. 国際金融、為替レート、国際マクロ経済学 k の理論を理解する (DP3) 2. 国際金融や国際経済に関するデータを入手し、分析するスキルを身に付ける (DP3)
授業方法と留意点	テキストに従った講義形式。必要に応じてプリントなどを配布。
授業(指導)計画	教材の内容の解説とディスカッション。
事前・事後学習課題	講義中に指示下教材の予習をしておくこと。適宜内容を理解度を確保するためレポートなどを提出してもらう。
評価基準	講義中の発言、提出物で評価する。
教材等	講義中指定
備考	

科目名	異文化理解 I	科目名 (英文)	Intercultural Communication I
配当年次	1 年	単位数	2
学期 (開講期)	前期	授業担当者	加来 奈奈

授業 (指導) 概要・目的	この授業では、異文化としてのヨーロッパを過去の視点から読み解いていき、ヨーロッパの社会・文化・政治についての理解を深めていきます。ヨーロッパの社会や文化、政治などに関する文献を事前に読んできて、授業中にディスカッションすることで、文献から必要な情報を読み取り、整理し、表現する力を養います。
到達目標	現在ヨーロッパの諸問題を過去と結びつけて考えることができるようになり、さらにそれを表現し、異文化共存社会について多角的にとらえることができるようになる。
授業方法と留意点	文献を事前に読んできて、授業中にディスカッションする形式を行います。
授業 (指導) 計画	第 1 回 ヨーロッパ社会と異文化共存について考える 第 2 回～第 14 回 ヨーロッパの歴史や社会に関する文献を読み、それに関してディスカッションを行う 前半は、ヨーロッパの宗教と歴史についての文献を読む 後半は、ヨーロッパの宗教と移民についての文献を読む 第 15 回 総括
事前・事後学習課題	事前、与えられた文献を読み、わからない用語などは調べてくる 事後、授業で議論したことを言葉にし、現代社会とのかかわりについて考える
評価基準	授業態度 (予習の具合とディスカッションの内容) 50%、レポート 50%
教材等	授業中に資料を配布する。
備考	事前事後の学習にかかる総時間を 60 時間程度とする。課題等のフィードバックは授業中に行う。

科目名	異文化理解 I	科目名 (英文)	Intercultural Communication I
配当年次	1 年	単位数	2
学期 (開講期)	前期	授業担当者	金子 正徳

授業 (指導) 概要・目的	文化人類学的な観点から授業を行う。そもそも「文化」とは何か、「文化」の主体は誰か、「文化」を研究することの課題などのほか、多様な文化動態について学ぶ。
到達目標	文化人類学的な文化概念を身につけ、研究上の観点として取り入れる。
授業方法と留意点	教科書を用いる。抽象的な概念を扱うので、積極的に事前・事後学習に取り組むことが求められる。 テーマに関するフィールドワークを課す。
授業 (指導) 計画	1. はじめに 2 から 14. 鏡味治也著、2010 年、『キーコンセプト 文化—近代を読み解く』、世界思想社をもとに、「文化」概念とその変化や現代的課題を検討する 15. まとめ
事前・事後学習課題	事前学習：各回に取り扱う章については初回に資料とともに提示するので、事前にノートを取りつつ読む。 事後学習：ノートに要点や講義において気づいたことを追記、整理する。
評価基準	ディスカッションおよび発表 (50%)、レポート (50%)
教材等	鏡味治也著、2010 年、『キーコンセプト 文化—近代を読み解く』、世界思想社
備考	

科目名	異文化理解 I	科目名 (英文)	Intercultural Communication I
配当年次	1 年	単位数	2
学期 (開講期)	前期	授業担当者	中島 直嗣

授業 (指導) 概要・目的	テーマは、「言語と文化」。英語および英語圏の国や地域を研究対象とし、主に社会言語学の観点から言語と文化の関係を考察する。また、英語の各方言の変化とその背景にある歴史的・社会的事象を確認しながら、現状および今後の推移についても考えてみたい。
到達目標	社会言語学の学問的知識と、人文科学の研究の手法を習得できる。
授業方法と留意点	文献・資料の読解、調査に基づく議論、レポートの作成などを中心に行っていく。
授業 (指導) 計画	英語および英語圏の国や地域を研究対象とし、主に社会言語学の観点から言語と文化の関係を考察する。 ・前半は、文献や資料を読解しながら、その要点を理解し、問題点を提起できるようにする。 ・後半は、英語の各方言の変化とその背景にある歴史的・社会的事象を確認しながら議論を展開し、レポートが作成できるように指導していく。
事前・事後学習課題	【事前学習】 毎回、設定されたテーマについて、文献・資料をを読んで、その内容を把握しておくこと。 【事後学習】 毎回の授業内容に基づいて、図書館等でさらに調べながら、理解と考察を深めること。 事前・事後学習の総時間数は 60 時間とする。
評価基準	授業に取り組む姿勢 50% レポートなどの提出物 50%
教材等	必要に応じて授業中に指示する。
備考	

科目名	異文化理解 I	科目名 (英文)	Intercultural Communication I
配当年次	1 年	単位数	2
学期 (開講期)	前期	授業担当者	中西 正樹

授業 (指導) 概要・目的	本講義では、「異文化理解」とは何かを、社会学上のいくつかの重要なキーワード、たとえば「アイデンティティ」「エスニシティ」「ナショナリズム」「グローバリズム」などを手掛かりに考えていく。授業は、キーワードごとに講義形式と発表・議論のセットで行う。文献をあらかじめ提示するので、それを読んで要約し論点を把握してから授業に臨むことが求められる。
到達目標	社会学的な視座から異文化を考察することができる。
授業方法と留意点	1) レジュメおよび文献を使用する。受講生は指定された文献を事前に読み要約や論点整理をしていくことが求められる。 2) 授業では、教員と受講生との議論、受講生同士の議論を重要視する。
授業 (指導) 計画	1. イントロダクション 2. 異文化理解とは何か 3. 文化的アイデンティティ 4. 発表と議論 5-8. エスニシティ 9. 発表と議論 10-13. ナショナリズムとグローバリズム 14. 発表と議論 15. まとめ
事前・事後学習課題	1) 事前に提示された文献を読み、要約と論点把握をした上で授業に臨むこと。 2) 授業中に提示された課題を提出すること。 3) 発表の準備をしておくこと。 4) 総時間数は60時間を目安とする。
評価基準	課題 (30%) 発表 (40%) 期末レポート (30%)
教材等	授業で指示する。
備考	

科目名	異文化理解 I	科目名 (英文)	Intercultural Communication I
配当年次	1 年	単位数	2
学期 (開講期)	前期	授業担当者	船本 弘史

授業 (指導) 概要・目的	物、価値観、制度、生活・行動様式、宗教、意識および情動の作用など、およそ人間との関係において顕現する事象は、文化的である。これらが還流するシステムの作用域をひとつの文化圏と称するならば、異文化理解とは個々の文化的事象の観察にとどまるのではなく、還流を生み出す動力をとらえ、その仕組みを知る、あるいはその仕組みに自己を投入し適応させることと見ることもできる。この授業では、この動力の資源となる言語に焦点をあて、言語分析を通じて文化のダイナミズムを記述するための枠組みを学ぶ。
到達目標	言語および言語使用の分析を通じて異文化を相対的に見る力を養う。そのために言語のレジスター分析において用いられる概念および技法を習得することを目標とする。
授業方法と留意点	レジスター理論に関連する主要な文献をいくつかとりあげて精読する。また、具体的な資料を用い、議論を通じて言語のレジスター分析を実践する。日常的に触れるテキストを批判的に観察する目を養ってほしい。
授業 (指導) 計画	M. A. K. ハリデーのレジスター理論を概観し、テキストに畳み込まれた言語機能を分解する。 J. R. マーティンのレジスター理論を概観し、言語使用に作用する状況のタイプを特定する。 R. P. フォーセットの包括的コミュニケーションモデルを概観し、認知・機能的な観点から「状況のコンテキスト」を記述する。
事前・事後学習課題	各回に指定する文献、資料をあらかじめ精読し、論点を整理してハンドアウトにまとめておく。 事後には授業で扱った内容をもとに課題に取り組み、提出する。 総時間数：60 時間
評価基準	授業時の取り組みとレポートを総合して評価する。
教材等	授業で指示する。
備考	

科目名	異文化理解 I	科目名 (英文)	Intercultural Communication I
配当年次	1 年	単位数	2
学期 (開講期)	前期	授業担当者	古矢 篤史

授業 (指導) 概要・目的	近現代の文学テキストを、その同時代の他の文化テキストとともに読解する。文学テキストがそれ単体で成立するのではなく、他のテキストと編み合いながら生成することを検証する。扱う文学テキストは履修者の研究テーマや関心に応じて選定する。
到達目標	近現代の文学テキストを、その同時代の他の文化テキストとともに読解できる。 必要な文献を調査することができる。 問いに即した議論と考察ができ、それらを言語化できる。
授業方法と留意点	履修者の研究テーマや関心に応じて指導する。
授業 (指導) 計画	第 1 回 ガイダンス 第 2 回以降 文学テキストの読解
事前・事後学習課題	事前・事後学習時間は 60 時間。授業で扱う文学テキストを事前に読み、事後は改めて読み直すこと。
評価基準	授業への取り組み (100%)
教材等	
備考	

科目名	異文化理解 I	科目名 (英文)	Intercultural Communication I
配当年次	1 年	単位数	2
学期 (開講期)	前期	授業担当者	森 類臣

授業 (指導) 概要・目的	本講義では、「異文化理解」とは何かを、社会学上のいくつかの重要なキーワード、特に「アイデンティティ」「エスニシティ」「ナショナリズム」「グローバリズム」などを手掛かりに考えていく。授業は、キーワードごとに講義形式と発表・議論のセットで行う。文献をあらかじめ提示するので、それを読んで要約し論点を把握してから授業に臨むことが求められる。
到達目標	社会的な視座から異文化を考察することができる。
授業方法と留意点	1) レジュメおよび文献を使用する。受講生は指定された文献を事前に読み要約や論点整理をしていくことが求められる。 2) 授業では、教員と受講生との議論、受講生同士の議論を重視する。
授業 (指導) 計画	1. イントロダクション 2. 異文化理解とは何か 3. 文化的アイデンティティ 4. 発表と議論 5-8. エスニシティ 9. 発表と議論 10-13. ナショナリズムとグローバリズム 14. 発表と議論 15. まとめ
事前・事後学習課題	1) 事前に提示された文献を読み、要約と論点把握をした上で授業に臨むこと。 2) 授業中に提示された課題を提出すること。 3) 発表の準備をしておくこと。 4) 総時間数は60時間を目安とする。
評価基準	課題 (30%) 発表 (40%) 期末レポート (30%)
教材等	授業で指示する。
備考	

科目名	異文化理解Ⅱ	科目名(英文)	Intercultural Communication II
配当年次	1年	単位数	2
学期(開講期)	後期	授業担当者	加来 奈奈

授業(指導)概要・目的	この授業では、異文化としてのヨーロッパを過去の視点から読み解いていき、ヨーロッパの社会・文化・政治についての理解を深めていきます。特にこの授業では、ヨーロッパの十字路口とも呼ばれるベルギーに注目します。ベルギーの社会や文化、政治などに関する文献を事前に読んできて、授業中にディスカッションすることで、文献から必要な情報を読み取り、整理し、表現する力を養います。
到達目標	現在ヨーロッパの諸問題を過去と結びつけて考えることができるようになり、さらにそれを表現し、異文化共存社会について多角的にとらえることができるようになる。
授業方法と留意点	文献を事前に読んできて、授業中にディスカッションする形式を行います。
授業(指導)計画	第1回 ヨーロッパ社会と異文化共存について考える 第2回～第14回 ヨーロッパの歴史や社会に関する文献を読み、それに関してディスカッションを行う 前半は、ベルギーの歴史と文化についての文献を読む 後半は、ベルギーの政治や社会についての文献を読む 第15回 総括
事前・事後学習課題	事前、与えられた文献を読み、わからない用語などは調べてくる 事後、授業で議論したことを言葉にし、現代社会とのかかわりについて考える
評価基準	授業態度(予習とディスカッションの内容)50%、レポート50%
教材等	授業中に資料を配布する。
備考	事前事後の学習にかかる総時間を60時間程度とする。課題等のフィードバックは授業中に行う。

科目名	異文化理解Ⅱ	科目名(英文)	Intercultural Communication II
配当年次	1年	単位数	2
学期(開講期)	後期	授業担当者	金子 正徳

授業(指導)概要・目的	文化人類学的な観点から授業を行う。引き続き「文化」とは何か、「文化」の主体は誰か、「文化」を研究することの課題などのほか、多様な文化動態について学ぶ。
到達目標	古典的な民族誌の内容を通して、オーソドックスな調査対象や調査手法について理解する。
授業方法と留意点	日本人にとっては異質な事例や概念を扱うので、積極的に事前・事後学習に取り組むことが求められる。 テーマに関するフィールドワークを課す。
授業(指導)計画	1. はじめに 2から14. 古典的な民族誌を読み解く 15
事前・事後学習課題	事前学習：各回に取り扱う民族誌については初回に資料とともに提示するので、事前にノートを取りつつ読む。 事後学習：ノートに要点や講義において気づいたことを追記、整理する。
評価基準	ディスカッションおよび発表(50%)、レポート(50%)
教材等	講義のはじめに指示する
備考	

科目名	異文化理解Ⅱ	科目名 (英文)	Intercultural Communication II
配当年次	1年	単位数	2
学期 (開講期)	後期	授業担当者	中島 直嗣

授業 (指導) 概要・目的	テーマは、「言語と文化」。英語および英語圏の国や地域を研究対象とし、主に社会言語学の観点から言語と文化の関係を考察する。また、英語の各方言の変化とその背景にある歴史的・社会的事象を確認しながら、現状および今後の推移についても考えてみたい。
到達目標	社会言語学の学問的知識と、人文科学の研究の手法を習得することができる。
授業方法と留意点	文献・資料の読解、調査に基づく議論、レポートの作成などを中心に行っていく。
授業 (指導) 計画	英語および英語圏の国や地域を研究対象とし、主に社会言語学の観点から言語と文化の関係を考察する。 ・前半は、文献や資料を読解しながら、その要点を理解し、問題点を提起できるようにする。 ・後半は、英語の各方言の変化とその背景にある歴史的・社会的事象を確認しながら議論を展開し、レポートが作成できるように指導していく。
事前・事後学習課題	【事前学習】 毎回、設定されたテーマについて、文献・資料を読んで、その内容を把握しておくこと。 【事後学習】 毎回の授業内容に基づいて、図書館等でさらに調べながら、理解と考察を深めること。 事前・事後学習の総時間数は60時間とする。
評価基準	授業に取り組む姿勢 50% レポートなどの提出物 50%
教材等	必要に応じて授業中に指示する。
備考	

科目名	異文化理解Ⅱ	科目名(英文)	Intercultural Communication II
配当年次	1年	単位数	2
学期(開講期)	後期	授業担当者	中西 正樹

授業(指導)概要・目的	本講義では、事例研究を通して「異文化理解」を考えていく。授業は、キーワードごとに講義形式と発表・議論のセットで行う。文献をあらかじめ提示するので、それを読んで要約し論点を把握してから授業に臨むことが求められる。また、受講生の理解を深めるために、ゲスト講義やフィールドワークを行う予定である。
到達目標	社会学的な概念を手掛かりに、事例に即して深く「異文化理解」の意味を考察することができる。
授業方法と留意点	1) レジューメおよび文献を使用する。受講生は指定された文献を事前に読み、要約や論点整理をしてから授業に参加することが求められる。 2) 授業では、教員と受講生との議論、受講生同士の議論を重要視する。
授業(指導)計画	1. イントロダクション 2-3. エスニシティ、エスニック・マイノリティ 4-7. 事例研究：在日コリアンの歴史と現在 8. 発表と議論 9-10. ステレオタイプ、エスノセントリズム、差別 11-13. 事例研究：在日コリアンとヘイトクライム 14. 発表と議論 15. まとめ
事前・事後学習課題	1) 事前に提示された文献を読み、要約と論点把握をした上で授業に臨むこと。 2) 授業中に提示された課題を提出すること。 3) 発表の準備をしておくこと。 4) 総時間数は60時間を目安とする。
評価基準	課題(30%) 発表(40%) 期末レポート(30%)
教材等	授業で指示する。
備考	

科目名	異文化理解Ⅱ	科目名(英文)	Intercultural Communication II
配当年次	1年	単位数	2
学期(開講期)	後期	授業担当者	船本 弘史

授業(指導)概要・目的	物、価値観、制度、生活・行動様式、宗教、意識および情動の作用など、およそ人間との関係において顕現する事象は、文化的である。これらが還流するシステムの作用域をひとつの文化圏と称するならば、異文化理解とは個々の文化的事象の観察にとどまるのではなく、還流を生み出す動力をとらえ、その仕組みを知る、あるいはその仕組みに自己を投入し適応させることと見ることもできる。この授業では、この動力の資源となる言語に焦点をあて、言語分析を通じて文化のダイナミズムを記述するための枠組みを学ぶ。
到達目標	言語を社会との接点から観察し、異文化を相対的に見る力を養う。そのためにジャンル理論および文化記号論の主要な概念を用いたテキスト分析の技法を習得することを目標とする。
授業方法と留意点	ジャンル理論および文化記号論に関連する主要な文献をいくつかとりあげて精読する。また、具体的な資料を用い、議論を通じて言語のジャンル分析を実践する。日常的に触れるテキストを批判的に観察する目を養ってほしい。
授業(指導)計画	J.R. マーティンのジャンル理論を概観し、言語使用の制度的タイプを分析する。 R. ハサンの文化記号論を精読する。 R.P. フォーセットの包括的コミュニケーションモデルを概観し、認知・機能的な観点から認識の“cultural classification”と指示表現の分析法を学ぶ。
事前・事後学習課題	各回に指定する文献、資料をあらかじめ精読し、論点を整理してハンドアウトにまとめておく。 事後には授業で扱った内容をもとに課題に取り組み、提出する。 総時間数：60時間
評価基準	授業時の取り組みとレポートを総合して評価する。
教材等	授業で指示する。
備考	

科目名	異文化理解Ⅱ	科目名 (英文)	Intercultural Communication II
配当年次	1年	単位数	2
学期 (開講期)	後期	授業担当者	古矢 篤史

授業 (指導) 概要・目的	異文化理解Ⅰに引き続き、近現代の文学テキストを、その同時代の他の文化テキストとともに読解する。文学テキストがそれ単体で成立するのではなく、他のテキストと編み合いながら生成することを検証する。扱う文学テキストは履修者の研究テーマや関心に応じて選定する。
到達目標	近現代の文学テキストを、その同時代の他の文化テキストとともに読解できる。 必要な文献を調査することができる。 問いに即した議論と考察ができ、それらを言語化できる。
授業方法と留意点	履修者の研究テーマや関心に応じて指導する。
授業 (指導) 計画	第1回 ガイダンス 第2回以降 文学テキストの読解
事前・事後学習課題	事前・事後学習時間は60時間。授業で扱う文学テキストを事前に読み、事後は改めて読み直すこと。
評価基準	授業への取り組み (100%)
教材等	
備考	

科目名	異文化理解Ⅱ	科目名 (英文)	Intercultural Communication II
配当年次	1年	単位数	2
学期 (開講期)	後期	授業担当者	森 類臣

授業 (指導) 概要・目的	本講義では、事例研究を通して「異文化理解」を考えていく。授業は、キーワードごとに講義形式と発表・議論のセットで行う。文献をあらかじめ提示するので、それを読んで要約し論点を把握してから授業に臨むことが求められる。また、受講生の理解を深めるために、ゲスト講義やフィールドワークを行うことも予定している。
到達目標	社会学的な概念を手掛かりに、事例に即して深く「異文化理解」の意味を考察することができる。
授業方法と留意点	1) レジュメおよび文献を使用する。受講生は指定された文献を事前に読み、要約や論点整理をしてから授業に参加することが求められる。 2) 授業では、教員と受講生との議論、受講生同士の議論を重要視する。
授業 (指導) 計画	1. イントロダクション 2-3. エスニシティ、エスニック・マイノリティ 4-7. 事例研究：在日コリアンの歴史と現在 8. 発表と議論 9-10. ステレオタイプ、エスノセントリズム、差別 11-13. 事例研究：在日コリアンとヘイトクライム 14. 発表と議論 15. まとめ
事前・事後学習課題	1) 事前に提示された文献を読み、要約と論点把握をした上で授業に臨むこと。 2) 授業中に提示された課題を提出すること。 3) 発表の準備をしておくこと。 4) 総時間数は60時間を目安とする。
評価基準	課題 (30%) 発表 (40%) 期末レポート (30%)
教材等	授業で指示する。
備考	

科目名	英米言語文化特論 I A	科目名 (英文)	Topics in English Language and CulturesIA
配当年次	1 年	単位数	2
学期 (開講期)	前期	授業担当者	西川 眞由美

授業 (指導) 概要・目的	この授業では、丁寧さ(politeness)や敬意表現、またメタファー(metaphor)やアイロニー(irony)など、語用論に関するさまざまな言語現象に関して、関連する理論を使用し、状況に応じたコミュニケーション (主に言語伝達) を多様な側面から分析し研究する。前半は語用論に関する主な論文を読み進め、理論自体の理解を深める。後半は、具体的な言語使用例を集め、それらを詳しく分析することにより、なぜ話し手はその状況でその発話を使うのか?聞き手はどのようにしてその発話を解釈するのか?さらに、その
到達目標	日常使っている言語表現の中で、興味深い表現を見つけ、なぜそのような表現が使われるのかについて考える。そのうえで、言語学、特に語用論やコミュニケーションの基礎となる概念や枠組みを理解する力、英語で言語学の論文を読みこなす力、さらに物事を論理的に思考する力を養い、言語表現が何をどのように伝えるのかを詳しく分析し考察する力を養うこと、などを目標とする。さらに、なぜ国や文化によってコミュニケーションの取り方が異なるのかなどについても、広くリサーチを行い、国際的な理解を深めることも目標とする。
授業方法と留意点	授業では、英語と日本語の多くの文献を読むので、必ず予習をして授業に臨むこと。 授業は、主に下記の項目に沿って行う。
授業 (指導) 計画	(1) 語用論・コミュニケーションとは (2) さまざまな語用論・コミュニケーションの理論 (3) 発話解釈と認知能力 (4) コミュニケーションにおける労力と効果 (5) 発話の含意 (6) 敬意表現やポライトネス (6) レトリック
事前・事後学習課題	各回の上記教材をあらかじめ読み、要点を整理しておくこと。また授業終了後、自分の考えをまとめ、中間および期末レポートの作成に備えること (合計 30 時間)。中間および期末レポートの作成 (合計 30 時間)
評価基準	平常点 40%、予習・課題 30%、 レポート 30%
教材等	適宜プリント配布
備考	課題は次の週に返却し、ポイントなどについて説明します。

科目名	英米言語文化特論 I B	科目名 (英文)	Topics in English Language and Cultures IB
配当年次	1 年	単位数	2
学期 (開講期)	後期	授業担当者	西川 真由美

授業 (指導) 概要・目的	この授業では、語用論・コミュニケーションに関するさまざまな理論を使用し、状況に応じたコミュニケーション (おもに言語伝達) を多様な側面から分析し研究する。英米言語文化特論 I A (語用論・英語コミュニケーション) 同様、語用論・コミュニケーションに関するさまざまな理論を使って、含意(implication)、間接表現(indirect expression)、丁寧さ(politeness)、敬意表現、レトリック (メタファー、アイロニー、誇張など)、談話標識(discourse marker)などがどのように解
到達目標	言語学、特に語用論の基礎となる概念や枠組みを理解すること、英語で言語学の論文を読みこなす力、さらに物事を論理的に思考する力を養うこと、言語表現が何を伝えるのかを考察することを目標とする。
授業方法と留意点	授業では、英語と日本語の多くの文献を読むので、必ず予習をして授業に臨むこと。 授業は、基本的に下記の項目に沿って行う。
授業 (指導) 計画	(1) 間接表現(indirect expression)と含意(implication) (2) 丁寧さ(politeness)と敬意表現 (3) レトリック表現の解釈と効果 (4) 談話標識 (discourse marker)の意味と機能 など
事前・事後学習課題	各回の指定教材をあらかじめ読み、要点を整理しておくこと。また、授業終了後、自分の考えをまとめ、中間および期末レポートの作成に備えること (合計 30 時間)。中間レポートおよび期末レポートの作成 (合計 30 時間)。
評価基準	平常点 40%、 予習・課題 30%、 レポート 30%
教材等	適宜プリント配布
備考	課題は次の週に返却し、ポイントなどについて説明します。

科目名	英米言語文化特論ⅡA	科目名(英文)	Topics in English Language and CulturesⅡA
配当年次	1年	単位数	2
学期(開講期)	前期	授業担当者	齋藤 安以子

授業(指導)概要・目的	本講義では、文体分析の基本的な考え方・データの収集方法、実際に分析を行っていく際の手続き、分析方法について理解を深めることを目的とする。また、文体論の知見を英語教育にどう活かすか、を考えることもめざす。
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文体分析の基本的な考え方・データ収集方法や分析の手続き、分析方法を理解する</li> <li>・実際に文学作品を使い、基本的な構造を見出し、分析できるようになる</li> </ul>
授業方法と留意点	授業では、講義と演習を交えて進めます。また、教科書の指定範囲について、要旨をまとめ発表してもらう機会を設けます。講義内容に関連する英語論文も必要に応じて取り上げます。
授業(指導)計画	<p>本講義では以下の順番・内容で進めていく</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 文体分析の視点と研究プロセス</li> <li>2. 書き言葉の文体についての講義と演習(データ分析)</li> <li>3. 話し言葉の文体についての講義と演習(データ分析)</li> </ol> <p>また、受講者の興味・関心に応じて、他のトピックについても適宜取り上げる</p>
事前・事後学習課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・指定教科書を事前に読んだり、授業後に読む</li> <li>・分析の課題に取り組む</li> </ul>
評価基準	<p>期末レポート：50%</p> <p>課題：30%</p> <p>授業参加度(ディスカッション・発表を含む)：20%</p>
教材等	<p>教科書：『英語のスタイル』 豊田昌倫・堀 正志・今林 修 (編著) 研究社. ISBN: 978-4-327-41096-4</p> <p>参考書：『言語と文学』 齋藤 兆史 (編著) 朝倉書房</p>
備考	<p>For contact email address, please ask the faculty office.</p> <p>資料の読み込み、発表の準備などにかかる事前事後の総時間を60時間程度とする。</p>

科目名	英米言語文化特論ⅡB	科目名(英文)	Topics in English Language and CulturesIIB
配当年次	1年	単位数	2
学期(開講期)	後期	授業担当者	齋藤 安以子

授業(指導)概要・目的	初期近代イギリス演劇を射程とし、特にシェイクスピア演劇に関する理論を学ぶ。
到達目標	様々なドラマ作品に触れることで、受講者のドラマ・リテラシーを涵養する。
授業方法と留意点	ルネサンス初期当時の様々な戯曲を原作で精読し、その作品に関連する書籍・論文等を参照しながら、作品論について考察および議論を行う。
授業(指導)計画	第1回-第15回 受講者の関心に合わせながら、ドラマ作品の選定、作品読解を行う。
事前・事後学習課題	取り上げる作品に関する情報を収集する(毎回2時間)。
評価基準	プレゼンテーション 20% レポート 80%
教材等	授業時に指示する
備考	資料の読み込み、発表の準備などにかかる事前事後の総時間を60時間程度とする。

科目名	英米言語文化特論ⅢA	科目名 (英文)	Topics in English Language and CulturesⅢA
配当年次	1年	単位数	2
学期 (開講期)	前期	授業担当者	柏原 郁子

授業 (指導) 概要・目的	ICT を効果的に活用するための教材研究・評価・作成を行う。ⅢA では、コンピュータ、インターネット、モバイル媒体を利用したリスニング・スピーキングのさまざまな ICT 教材について、実際に活用し、評価を行う。受講者は Moodle、その他のツールを利用し、学習者に動機付けを与え、学習継続が可能なリスニング・スピーキングコンテンツを作成する。
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・さまざまな ICT 英語教材のコンテンツを分析できる</li> <li>・ICT 教材を実践利用し、独自のコンテンツを作成できる</li> </ul>
授業方法と留意点	ICT 教材を実際に活用し、その内容と構成について発表を行い、自ら実践した学習履歴をもとに教材評価を行う。
授業 (指導) 計画	<p>本講義では以下に進めていく</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. ICT 教材 (リスニング・スピーキング) の紹介</li> <li>2. 1 の教材の実践活用 (コンテンツ・構成の分析)</li> <li>3. 2 で得た学習履歴を元に、教材評価を行う。</li> </ol>
事前・事後学習課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業で取り上げた ICT 教材の取り組み</li> <li>・コンテンツの分析と学習履歴の記録</li> </ul>
評価基準	課題への取り組み 40% 授業への貢献度 (ディスカッション・プレゼン発表を含む) 40% レポート 20%
教材等	『授業内で指示する』
備考	事前・事後学習総時間をおおよそ 60 時間程度とする。

科目名	英米言語文化特論ⅢB	科目名 (英文)	Topics in English Language and CulturesⅢB
配当年次	1年	単位数	2
学期 (開講期)	後期	授業担当者	柏原 郁子

授業 (指導) 概要・目的	ICT を効果的に活用するための教材研究・評価・作成を行う。IIIB では、コンピュータ、インターネット、モバイル媒体を利用したリーディング・ライティングのさまざまな ICT 教材について、実際に活用し、評価を行う。受講者は Moodle、その他のツールを利用し、学習者に動機付けを与え、学習継続が可能なリーディング・ライティングコンテンツの作成をすることを目的とする。
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・さまざまな ICT 英語教材のコンテンツを分析できる</li> <li>・ICT 教材を実践利用し、独自のコンテンツを作成できる</li> </ul>
授業方法と留意点	ICT 教材を実際に活用し、その内容と構成について発表を行い、自ら実践した学習履歴をもとに教材評価を行う。
授業 (指導) 計画	<p>本講義では以下に進めていく</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. ICT 教材 (リーディング・ライティング) の紹介</li> <li>2. 1 の教材の実践活用 (コンテンツ・構成の分析)</li> <li>3. 2 で得た学習履歴を元に、教材評価を行う。</li> </ol>
事前・事後学習課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業で取り上げた ICT 教材の取り組み</li> <li>・コンテンツの分析と学習履歴の記録</li> </ul>
評価基準	課題への取り組み 40% 授業への貢献度 (ディスカッション・プレゼン発表を含む) 40% レポート 20%
教材等	『授業内で指示する』
備考	事前・事後学習総時間をおおよそ 60 時間程度とする。

科目名	英米言語文化特論IVA	科目名 (英文)	Topics in English Language and CulturesIVA
配当年次	1年	単位数	2
学期 (開講期)	前期	授業担当者	中島 直嗣

授業 (指導) 概要・目的	テーマは「音声学と音韻論」。主に現代英語のデータの言語科学的分析に基づいて、音声学および音韻論の理論について学んでいく。具体的には、分節音 (母音・子音) における基本的特徴や、連結・脱落・同化などの音連続における現象、さらには強勢やリズム・イントネーションといった韻律的特徴にも注目し、考察を行っていく。
到達目標	音声学と音韻論の学問的知識と、その研究の手法を習得できる。
授業方法と留意点	文献・資料の読解、調査に基づく議論、レポートの作成などを中心に行っていく。
授業 (指導) 計画	<ul style="list-style-type: none"> <li>・前半は、音声学と音韻論に関する文献や資料を読解しながら、その要点を理解するとともに、疑問点や問題点を提起できるようにする。</li> <li>・後半は、その疑問点や問題点の解決方法について、言語科学的な手法に基づいて議論を展開し、論文が作成できるように指導していく。</li> </ul>
事前・事後学習課題	<p>【事前学習】 毎回、設定されたテーマについて、文献・資料をを読んで、その内容を把握しておくこと。</p> <p>【事後学習】 毎回の授業内容に基づいて、図書館等でさらに調べながら、理解と考察を深めること。</p> <p>事前・事後学習の総時間数は60時間とする。</p>
評価基準	授業に取り組む姿勢 50% レポートなどの提出物 50%
教材等	必要に応じて授業中に指示する。
備考	

科目名	英米言語文化特論IVB	科目名 (英文)	Topics in English Language and CulturesIVB
配当年次	1年	単位数	2
学期 (開講期)	後期	授業担当者	中島 直嗣

授業 (指導) 概要・目的	テーマは「音声学と音韻論」。主に現代英語のデータの言語科学的分析に基づいて、音声学および音韻論の理論について学んでいく。具体的には、形態論 (語形成) とのインターフェイスや、語順や品詞といった文法と音声の関連性、さらには世界の英語の変種などにも視野を広げ、言語の多様性と普遍性についても追究してみたい。
到達目標	英語学と音声学の学問的知識と、その研究の手法を習得できる。
授業方法と留意点	文献・資料の読解、調査に基づく議論、レポートの作成などを中心に行っていく。
授業 (指導) 計画	<ul style="list-style-type: none"> <li>前半は、音声学と音韻論に関する文献や資料を読解しながら、その要点を理解するとともに、疑問点や問題点を提起できるようにする。</li> <li>後半は、その疑問点や問題点の解決方法について、言語科学的な手法に基づいて議論を展開し、論文が作成できるように指導していく。</li> </ul>
事前・事後学習課題	<p>【事前学習】 毎回、設定されたテーマについて、文献・資料をを読んで、その内容を把握しておくこと。</p> <p>【事後学習】 毎回の授業内容に基づいて、図書館等でさらに調べながら、理解と考察を深めること。</p> <p>事前・事後学習の総時間数は60時間とする。</p>
評価基準	授業に取り組む姿勢 50% レポートなどの提出物 50%
教材等	必要に応じて授業中に指示する。
備考	

科目名	英米言語文化特論VA	科目名 (英文)	Topics in English Language and CulturesVA
配当年次	1年	単位数	2
学期 (開講期)	前期	授業担当者	鳥居 祐介

授業 (指導) 概要・目的	アメリカ研究(American Studies)の主要な理論と実践について学ぶ。アメリカ合衆国の人種、階級、ジェンダーに焦点をあてた学際研究分野がどのように発達し、変化しつつあるのかを、研究の実例を読み、討議する。研究の実例は20世紀のアメリカ文化史、とりわけ大衆文化(Popular Culture)を対象としたものから受講生の関心に応じて選ぶ。
到達目標	英語圏の文化研究の問題意識と用語に親しみ、特にアメリカ合衆国の文化についての学術的論考を批判的に読解できるようになる。
授業方法と留意点	英語、日本語によるリーディングとディスカッションを中心に進める。受講生にはアメリカ合衆国の文化や歴史に対する強い関心と共に、理論的、抽象的なものを含む多くの文献を精読する意欲が要求される。
授業 (指導) 計画	受講生の語学力および関心分野に合わせて教科書を選定し、最初の3週間で教科書以外の文献も含めた英語文献・日本語文献からなるリーディング・リストを作成する。以降、受講生はリストに従い、文献を読み進めながらディスカッションを行う。学期末には読了した文献についてのレポートを作成する。
事前・事後学習課題	毎回、指定のリーディングについての疑問やコメントを用意して授業に臨むこと。
評価基準	ディスカッションへの貢献70% + 学期末レポート30%
教材等	受講生と面談の上、リーディングリストを作成する。
備考	研究室は7号館3階

科目名	英米言語文化特論VB	科目名 (英文)	Topics in English Language and CulturesVB
配当年次	1年	単位数	2
学期 (開講期)	後期	授業担当者	鳥居 祐介

授業 (指導) 概要・目的	アメリカ研究(American Studies)の主要な理論と実践について学ぶ。アメリカ合衆国の人種、階級、ジェンダーに焦点をあてた学際研究の実例を読み、討議することを通じて研究分野への理解を深め、先行研究を批判的に読む姿勢を身につける。研究の実例は受講生の関心に応じて選ぶ。実例の中で分析対象とされている一次資料の読解も行う。
到達目標	英語圏の文化研究の問題意識と用語に親しみ、特にアメリカ合衆国の文化についての学術的論考を読解できるようになる。
授業方法と留意点	英語、日本語によるリーディングとディスカッションを中心に進める。受講生にはアメリカ合衆国の文化や歴史に対する強い関心と共に、理論的、抽象的なものを含む多くの文献を精読する意欲が要求される。
授業 (指導) 計画	受講生と面談の上、作成したリーディング・リストを適宜増補、改定しながら進める。受講生はリストに従い、文献を読みディスカッションを行う。学期末には読了した文献についてのレポートを作成する。
事前・事後学習課題	毎回、指定のリーディングについての疑問やコメントを用意して授業に臨むこと。
評価基準	ディスカッションへの貢献 70% + 学期末レポート 30%
教材等	受講生と面談の上、リーディングリストを作成する。
備考	研究室は7号館3階

科目名	英米言語文化特論ⅦA	科目名 (英文)	Topics in English Language and CulturesⅦA
配当年次	1年	単位数	2
学期 (開講期)	前期	授業担当者	後藤 一章

授業 (指導) 概要・目的	コーパス言語学について学習し、コーパスと何か、どのような分析が可能であるかを理解する。また、実際に自分自身でコーパスを構築、さらに分析するためのコンピュータスキルをみにつける。
到達目標	電子コーパスを用いて語彙や統語構造の用法及びパターンなどを実証的かつ統計的に研究するための力を養う。文字列処理やテキスト解析を行うためのプログラミング言語を習得することを目標の一つとする。
授業方法と留意点	コーパス言語学の入門書を熟読する。また、プログラミング言語を学習する。プログラミングにはやや高度なコンピュータスキルが必要となるため、テキスト整形やファイル操作、可能であれば初歩的なシェルスクリプトの知識を有していることが望ましい。
授業 (指導) 計画	前半：資料を読みながら、コーパス言語学の基本的な知識を習得する。 後半：プログラミング学習を行う。変数、四則演算、配列、if 文、while 文、文字列検索、などの仕組みとコーディングを理解する。
事前・事後学習課題	各回の指定教材を予め通読のうえ、要点を整理し、必要に応じて発表の準備をしておくこと。また、日頃から自らの考えをまとめておき、中間、及び期末課題に備えること (合計 30h)。
評価基準	授業時のパフォーマンスとレポートを基本に評価する。
教材等	授業中に配布する。
備考	

科目名	英米言語文化特論VII B	科目名 (英文)	Topics in English Language and CulturesVII B
配当年次	1 年	単位数	2
学期 (開講期)	後期	授業担当者	後藤 一章

授業 (指導) 概要・目的	コーパス言語学について学習し、コーパスと何か、どのような分析が可能であるかを理解する。また、実際に自分自身でコーパスを構築、さらに分析するためのコンピュータスキルをみにつける。
到達目標	電子コーパスを用いて語彙や統語構造の用法及びパターンなどを実証的かつ統計的に研究するための力を養う。文字列処理やテキスト解析を行うためのプログラミング言語を習得することを目標の一つとする。
授業方法と留意点	コーパス言語学の入門書を熟読する。また、プログラミング言語を学習する。プログラミングにはやや高度なコンピュータスキルが必要となるため、テキスト整形やファイル操作、可能であれば初歩的なシェルスクリプトの知識を有していることが望ましい。
授業 (指導) 計画	前半：資料を読みながら、コーパス言語学の応用的な知識を習得する。 後半：より高度なプログラミング学習を行う。for 文、foreach 文、連想配列、サブルーチン、などの仕組みとコーディングを理解する。
事前・事後学習課題	各回の指定教材を予め通読のうえ、要点を整理し、必要に応じて発表の準備をしておくこと。また、日頃から自らの考えをまとめておき、中間、及び期末課題に備えること (合計 30 h)。
評価基準	授業時のパフォーマンスとレポートを基本に評価する。
教材等	授業中に配布する。
備考	

科目名	英米言語文化特論ⅧA	科目名 (英文)	Topics in English Language and CulturesⅧA
配当年次	1年	単位数	2
学期 (開講期)	前期	授業担当者	船本 弘史

授業 (指導) 概要・目的	選択体系機能言語学について学ぶ。ここでは特に M. A. K. Halliday の理論および記述を中心に学び、そこで登場する概念および方法を用いて英語および日本語のテキスト分析を行う。
到達目標	M. A. K. Halliday が展開する文法理論およびテキスト分析の基本概念と方法を理解することができる。 M. A. K. Halliday の言語理論を用いて実際のテキストデータを分析し、自論を展開することができる。
授業方法と留意点	授業では教科書の一定の範囲についてあらかじめ精読し、発表を行うことによって進める。そのうえで、内容について議論し、それをもとに自身の分析法を改善し、論文形式で立論するというサイクルで展開できるようにする。
授業 (指導) 計画	1回の授業でおよそ 50 ページを読み進める。 学期末にはテーマを決めて小論文を課す。
事前・事後学習課題	授業前には、指定された範囲を精読しその内容について発表できるよう必要な資料等を準備する。 授業後には、授業で扱った議論をもとに自身の見解を含むエッセイを書き、提出する。
評価基準	発表、エッセイ 40% 期末小論文 60%
教材等	都度、指示する。
備考	

科目名	英米言語文化特論ⅧB	科目名 (英文)	Topics in English Language and CulturesⅧIIB
配当年次	1年	単位数	2
学期 (開講期)	後期	授業担当者	船本 弘史

授業 (指導) 概要・目的	選択体系機能言語学について学ぶ。ここでは特に Robin P. Fawcett の「カーディフ・グラマー」の理論および記述を中心に学び、そこで登場する概念および方法を用いて英語および日本語のテキスト分析を行う。
到達目標	Robin P. Fawcett が展開する文法理論およびテキスト分析の基本概念と方法を理解することができる。 Robin P. Fawcett の言語理論を用いて実際のテキストデータを分析し、自論を展開することができる。
授業方法と留意点	授業では教科書の一定の範囲についてあらかじめ精読し、発表を行うことによって進める。そのうえで、内容について議論し、それをもとに自身の分析法を改善し、論文形式で立論するというサイクルで展開できるようにする。
授業 (指導) 計画	1回の授業でおよそ 50 ページを読み進める。 学期末にはテーマを決めて小論文を課す。
事前・事後学習課題	授業前には、指定された範囲を精読しその内容について発表できるよう必要な資料等を準備する。 授業後には、授業で扱った議論をもとに自身の見解を含むエッセイを書き、提出する。
評価基準	発表、エッセイ 40% 期末小論文 60%
教材等	授業で指示する。
備考	

科目名	欧米地域文化特論 I A	科目名 (英文)	Topics in Western Regions and Cultures I A
配当年次	1 年	単位数	2
学期 (開講期)	前期	授業担当者	有馬 善一

授業 (指導) 概要・目的	ヨーロッパは近代化をいち早く成し遂げることで、世界史をリードする存在となった。しかし、近代化の運動そのものは、ヨーロッパという一地域に限定されるものではなく、近代的な人間観、資本主義と産業社会の発達、科学・技術の進歩は、やがて地球的規模に拡大し、現代においてはかつて植民地として欧米に支配されていた地域の隆盛をみるに至っている。 本講義では近代を特徴付けている「近代性」とは何であったのかという問題提起から始めて、「もはや近代ではない」と言われる現代のポストモダンの動向の本質に関する考察まで議論を展開し
到達目標	近代性とは何か、近代的な人間とはいかなるものかについて理解する。
授業方法と留意点	教科書を用いない、ノートによる講義形式。参加者の積極的な発言も期待する。
授業 (指導) 計画	1. 自由主義と資本主義の発達 2. 合理主義と科学・技術の進歩 3. 近代的な人間の誕生
事前・事後学習課題	授業で取り上げる近代性に関わる諸概念について、あらかじめ調べてくる。 授業中で問題となった近代の問題について、適宜、参考図書を読み、内容を報告する。 事前・事後学習に最低 30 時間ずつ必要。
評価基準	平常点 (40%) とレポート (60%) で評価する。
教材等	アンソニー・ギデنز『近代とはいかなる時代か?』(而立書房) 他は、適宜配布する
備考	

科目名	欧米地域文化特論 I B	科目名 (英文)	Topics in Western Regions and Cultures I B
配当年次	1 年	単位数	2
学期 (開講期)	後期	授業担当者	有馬 善一

授業 (指導) 概要・目的	<p>ヨーロッパは近代化をいち早く成し遂げることで、世界史をリードする存在となった。しかし、近代化の運動そのものは、ヨーロッパという一地域に限定されるものではなく、近代的な人間観、資本主義と産業社会の発達、科学・技術の進歩は、やがて地球的規模に拡大し、現代においてはかつて植民地として欧米に支配されていた地域の隆盛をみるに至っている。</p> <p>本講義では近代を特徴付けている「近代性」とは何であったのかという問題提起から始めて、「もはや近代ではない」と言われる現代のポストモダンの動向の本質に関する考察まで議論を展開</p>
到達目標	ポスト・モダンとは何かということを理解し、ポスト・モダンの状況の問題性を把握する。
授業方法と留意点	教科書を用いない、ノートによる講義形式。参加者の積極的な発言も期待する。
授業 (指導) 計画	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 資本主義の帰結としての情報化・消費化社会</li> <li>2. グローバル化の問題</li> <li>3. 近代的人間の〈死〉</li> <li>4. 科学・技術の〈暴走〉と危険社会の到来</li> </ol>
事前・事後学習課題	<p>授業で取り上げるポストモダンに関わる諸概念について、あらかじめ調べてくる。</p> <p>授業中で問題となった近代の問題について、適宜、参考図書を読み、内容を報告する。</p> <p>事前・事後学習に最低 30 時間ずつ必要。</p>
評価基準	平常点 (40%) とレポート (60%) で評価する。
教材等	<p>ボードリヤール『消費社会の神話と構造』(紀伊國屋書店)</p> <p>他は、適宜配布する</p>
備考	

科目名	欧米地域文化特論ⅡA	科目名(英文)	Topics in Western Regions and Cultures II A
配当年次	1年	単位数	2
学期(開講期)	前期	授業担当者	藤井 嘉祥

授業(指導)概要・目的	グローバル化のなかでの現代ラテンアメリカの社会・経済・政治の特性とそれをもたらした歴史的過程を理解すること、および現代ラテンアメリカの社会問題の分析方法を修得することを目的とする。現代ラテンアメリカは民族的に多様であるがゆえの先住民の自治権の問題、経済的な貧富の格差やインフォーマル経済の問題、左傾化と右傾化を繰り返す不安定な政治情勢などに特徴づけられるが、外国語文献(スペイン語・英語)を用いてそうした論点を整理し、検討する。ラテンアメリカを多面的に検討することをとおして、地域研究の手法を身につける。
到達目標	地域としてのラテンアメリカの歴史的・現代的な論点について分析的に説明できる。 外国語文献を批判的に読み解くことができる。
授業方法と留意点	スペイン語または英語で書かれた先行研究と統計資料などを読む必要があるため、必ず予習をして授業に臨むこと。
授業(指導)計画	第1回～3回 オリエンテーション ラテンアメリカの歴史的特性 第4回～6回 経済開発の戦略 第7回～9回 貧困と所得分配 第10回～12回 社会的排除と包摂 第13回～15回 市民社会と社会運動 総括
事前・事後学習課題	教員が指定する文献を読んでレジュメにまとめる。 事前・事後学習に要する総時間数は60時間とする。
評価基準	授業への取り組み(20%)、中間発表(40%)、期末レポート(40%)で総合的に評価する。
教材等	プリント配布。参考文献については適宜指示する。
備考	

科目名	欧米地域文化特論ⅡB	科目名(英文)	Topics in Western Regions and Cultures II B
配当年次	1年	単位数	2
学期(開講期)	後期	授業担当者	藤井 嘉祥

授業(指導)概要・目的	グローバル化のなかでの現代ラテンアメリカの社会・経済・政治の特性とそれをもたらした歴史的過程を理解すること、および現代ラテンアメリカの社会問題の分析方法を修得することを目的とする。現代ラテンアメリカは民族的に多様であるがゆえの先住民の自治権の問題、経済的な貧富の格差やインフォーマル経済の問題、左傾化と右傾化を繰り返す不安定な政治情勢などに特徴づけられるが、外国語文献(スペイン語・英語)を用いてそうした論点を整理し、検討する。ラテンアメリカを多面的に検討することをとおして、地域研究の手法を身につける。
到達目標	ラテンアメリカの社会・経済をめぐる論点について分析的に説明できる。 外国語文献を批判的に読み解くことができる。
授業方法と留意点	スペイン語または英語で書かれた先行研究と統計資料などを多く読む必要があるため、必ず予習をして授業に臨むこと。
授業(指導)計画	第1回～3回 オリエンテーション 現代ラテンアメリカの社会経済問題 第4回～6回 成長する国と停滞する国の違いとは 第7回～9回 インフォーマル経済、貧困の統計的分析 第10回～12回 労働におけるビジネスと人権：民主主義の質に関して 第13回～15回 越境移民と移民コミュニティによる社会空間の再形成 総括
事前・事後学習課題	教員が指定する文献を読んでレジュメにまとめる。 事前・事後学習に要する総時間数は60時間とする。
評価基準	授業への取り組み(20%)、中間発表(40%)、レポート(40%)で総合的に評価する。
教材等	プリント配布。参考文献については適宜指示する。
備考	

科目名	欧米地域文化特論ⅢA	科目名 (英文)	Topics in Western Regions and Cultures III A
配当年次	1年	単位数	2
学期 (開講期)	前期	授業担当者	加来 奈奈

授業 (指導) 概要・目的	歴史学の視点から西洋世界を中心とするジェンダーの問題に迫る。近世ヨーロッパでは、外交において女性はあまり活躍されなかったとされながらも、多くの王家の女性たちは、仲介者としてヨーロッパの平和交渉に尽力した。近世ヨーロッパの国際関係を理解するとともに、そうしたなかで女性が具体的にどのような活動したのかを、欧米文献や史料をとして、実証的に明らかにし、説明する力を身につける。
到達目標	近世ヨーロッパという歴史的事象にジェンダーという観点からアプローチする手法を身につける。
授業方法と留意点	講義、史料購読、ディスカッションを織り交ぜながら指導する。
授業 (指導) 計画	第1～2回 インTRODakシヨN 先行研究の紹介 第3～5回 近世ヨーロッパの君主と王妃たち 第6～8回 ハプスブルク家の女性 第9～12回 平和交渉での活躍 第13～15回 王家の女性と外交～総括～
事前・事後学習課題	授業の内容に応じて、適宜指示する。 事前事後の学習にかかる総時間を60時間程度とする。課題等のフィードバックは授業中に行う。
評価基準	授業中に作成する小レポート (授業内容の理解度をはかるもの) : 20% 期末レポート : 80%
教材等	
備考	

科目名	欧米地域文化特論ⅢB	科目名 (英文)	Topics in Western Regions and Cultures III B
配当年次	1年	単位数	2
学期 (開講期)	後期	授業担当者	加来 奈奈

授業 (指導) 概要・目的	歴史学の視点からヨーロッパの宮廷文化の諸相に迫る。近世ヨーロッパの政治の場である宮廷における儀礼や人の動向を具体的に見ていくことで、当時の宮廷の果たした文化的かつ政治的役割をさぐる。近世はとりわけ宮廷が政治の中心であったため、そうした場における象徴的な動作や具体的な手続きについてみていくことで、近年活発に研究されるヨーロッパの宮廷の多様な要素を考察する。
到達目標	宮廷という観点から歴史にアプローチするための一次史料の活用方法を身につける。
授業方法と留意点	講義、史料講読、ディスカッションを織り交ぜながら指導する。
授業 (指導) 計画	第1～2回 インTRODクシヨN 先行研究紹介 第3～5回 ヨーロッパの宮廷 第6～8回 政治の場としての宮廷 第9～11回 宮廷組織と史料講読～ディスカッション～ 第12～13回 宮廷儀礼の意味 第14～15回 史料の活用～総括～
事前・事後学習課題	授業の内容に応じて適宜指示する。 事前・事後学習時間 60h
評価基準	授業中に課題や議論 : 80% 期末レポート : 20%
教材等	
備考	

科目名	欧米地域文化特論ⅣA	科目名 (英文)	Topics in Western Regions and Cultures IV A
配当年次	1年	単位数	2
学期 (開講期)	前期	授業担当者	藤井 嘉祥

授業 (指導) 概要・目的	経済領域に端を発するグローバリゼーションが社会領域に浸透するプロセス、およびグローバル経済の深化がもたらす諸問題への社会の対応を理解し、分析方法を身につけることを目的とする。1990年代から加速度的に発展してきた新自由主義経済の下で、市場と国家の関係の変化や社会における分断が進行しており、それがグローバル社会を特徴づけている。経済と社会の関係に関する理論を手掛かり、複数の事例を検討することを通じて、グローバル社会の実相を捉える。
到達目標	グローバル社会をめぐる論点について分析的に説明できる。 外国語文献を批判的に読み解くことができる。
授業方法と留意点	講義、文献講読、ディスカッションを交えて指導する。予習を十分にしておくこと。
授業 (指導) 計画	第1回～3回 オリエンテーション 経済と社会はどのように関係するか 第4回～6回 新自由主義経済下の市場と国家 第7回～9回 グローバルバリューチェーンと産業高度化 第10回～12回 「底辺への競争」と劣化する労働環境 第13回～15回 グローバルバリューチェーンと社会的高度化 総括
事前・事後学習課題	教員が指定する文献を読んでレジュメにまとめる。 事前・事後学習に要する総時間数は60時間とする。
評価基準	授業への取り組み (20%)、中間発表 (40%)、レポート (40%) で総合的に評価する。
教材等	プリント配布。参考文献については適宜指示する。
備考	

科目名	欧米地域文化特論IV B	科目名 (英文)	Topics in Western Regions and Cultures IV B
配当年次	1 年	単位数	2
学期 (開講期)	後期	授業担当者	藤井 嘉祥

授業 (指導) 概要・目的	経済領域に端を発するグローバリゼーションが社会領域に浸透するプロセス、およびグローバル経済の深化がもたらす諸問題への社会の対応を理解し、分析手法を修得することを目的とする。1990年代から加速度的に発展してきた新自由主義経済の下で、市場と国家の関係の変化や社会における分断が進行しており、それがグローバル社会を特徴づけている。経済と社会の関係に関する理論を手掛かり、グローバルガバナンスと市民社会に焦点を当てて、複数の事例を検討することを通じて、グローバル社会の実相を捉える。
到達目標	グローバルガバナンスと市民社会をめぐる論点について分析的に説明できる。 外国語文献を批判的に読み解くことができる。
授業方法と留意点	講義、文献講読、ディスカッションを交えて指導する。予習を十分にしておくこと。
授業 (指導) 計画	第1回～3回 オリエンテーション 新自由主義経済の矛盾を制御するグローバルガバナンス 第4回～6回 多様な労働問題と国際規範としての国連ビジネスと人権原則 第7回～9回 CSRとソーシャルビジネス 第10回～12回 市民社会とソーシャルキャピタル 第13回～15回 連帯経済 総括
事前・事後学習課題	教員が指定する文献を読んでレジюмеにまとめる。 事前・事後学習に要する総時間数は60時間とする。
評価基準	授業への取り組み (20%)、中間発表 (40%)、レポート (40%) で総合的に評価する。
教材等	プリント配布。参考文献については適宜指示する。
備考	

科目名	アジア言語文化特論 I A	科目名 (英文)	Topics in Asian Languages and Cultures I A
配当年次	1 年	単位数	2
学期 (開講期)	前期	授業担当者	中西 正樹

授業 (指導) 概要・目的	中国とその周辺地域では、「漢字文化圏」という言葉に象徴される通り、漢字を支柱とする文化を形成してきた。この授業では、その漢字がどのように誕生し、継承されてきたのかを概観したあと、漢字の研究にスポットを当てて、方法論の違いやそこで生じた問題について最新の成果を含めて理解することを目的とする。
到達目標	漢字に対する理解にとどまらず、研究の方法やその検証のあり方、失敗の事例についても理解することができる。
授業方法と留意点	演習形式で授業をすすめる。授業は基本的に教科書に沿って進めるが、授業ごとに関連する資料を用いた発表を行う。
授業 (指導) 計画	教科書は下の項目から成り、基本的に一つの章を 2 回に分けて、前半を講読と要約、関係資料の調査、後半で調査結果の発表というパターンを繰り返す。  第 1 章 漢字の誕生と継承 第 2 章 漢字の成り立ちと三つの要素 第 3 章 字源研究の歴史 第 4 章 字音からの字源研究 第 5 章 字形からの字源研究 第 6 章 字義からの字源研究 第 7 章 最新の成果  学んだ内容をまとめたレポートを学期末に提出する。
事前・事後学習課題	授業外では、事前の調査および事後のまとめにそれぞれ 1 時間をかける。
評価基準	レポート 70%、プレゼン 30%。
教材等	落合淳思著『漢字の成り立ち：『説文解字』から最先端の研究まで』など
備考	

科目名	アジア言語文化特論 I B	科目名 (英文)	Topics in Asian Languages and Cultures I B
配当年次	1 年	単位数	2
学期 (開講期)	後期	授業担当者	中西 正樹

授業 (指導) 概要・目的	中国伝統文化の思考様式、生活文化、精神文化及び中国語表現の視点から、中国言語文化を検討し、その実相を把握することを目指す。
到達目標	中国文化のあり方をよく理解し、国際的なセンスを高める。
授業方法と留意点	大学院の授業であるから、教科書などの予習復習を十分に行うほか、自主的に参考文献を図書館などで探し調査閲覧すること。
授業 (指導) 計画	授業概要・目的の内容と合うテキストを選び、講読していく。
事前・事後学習課題	各回の指定教材をあらかじめ通読し、内容を把握しておくこと。重要な事項は事前に調べておくこと。
評価基準	レポート 70%、プレゼン 30%。
教材等	『対話中国・物態文化篇』、『対話中国・心態文化篇』(張健、董萃 主編、北京言語大学出版社、2013~2014)
備考	

科目名	アジア言語文化特論ⅡA	科目名(英文)	Topics in Asian Languages and Cultures II A
配当年次	1年	単位数	2
学期(開講期)	前期	授業担当者	浦野 崇央

授業(指導)概要・目的	インドネシアと日本の関係性を中心に研究する。研究の対象は、インドネシアー日本の人的交流・物的交流、あるいはインドネシアにおける日本語学修状況、日本におけるインドネシア語学修状況など、さまざまである。この講義では、特に日本とインドネシアの関係性における特徴的な傾向を把握し、その共通点と相違点を探る。
到達目標	インドネシアと日本の関係性の探究を通じて、グローバル世界での位置づけが把握できる。
授業方法と留意点	予習を必ずすること。
授業(指導)計画	授業概要・目的の内容と合致する論文(日本語・インドネシア語・英語)を選び、講読していく。
事前・事後学習課題	各回の指定教材をあらかじめ通読し、内容をまとめておくこと。重要な事項は事前に調べておくこと。 ★事前・事後学習の総時間数は60時間程度を目安とする★
評価基準	受講状況(20%)およびレポートの内容(80%)
教材等	配布プリント
備考	

科目名	アジア言語文化特論ⅡB	科目名(英文)	Topics in Asian Languages and Cultures II B
配当年次	1年	単位数	2
学期(開講期)	後期	授業担当者	浦野 崇央

授業(指導)概要・目的	アジア言語文化特論ⅡA(前期)の授業内容を発展させ、引き続き、日本とインドネシアの関係性について探究する。
到達目標	インドネシアと日本の関係性の探究を通じて、グローバル世界での位置づけが把握できる。
授業方法と留意点	予習を必ずすること。
授業(指導)計画	授業概要・目的の内容と合致する論文(日本語・インドネシア語・英語)を選び、講読していく。
事前・事後学習課題	各回の指定教材をあらかじめ通読し、内容をまとめておくこと。重要な事項は事前に調べておくこと。 ★事前・事後学習の総時間数は60時間程度を目安とする★
評価基準	受講状況(20%)およびレポート(80%)
教材等	配布プリント資料
備考	

科目名	アジア言語文化特論ⅢA	科目名 (英文)	Topics in Asian Languages and Cultures III A
配当年次	1年	単位数	2
学期 (開講期)	前期	授業担当者	田中 悟

授業 (指導) 概要・目的	東アジアの地域研究に関する様々な文献を取り上げ、その内容について考察・検討を加える。 事例研究や関心分野の研究動向についての正確な知識を得ることを目的とする。
到達目標	東アジア地域研究についての基礎的な知識を有し、先行研究を踏まえた考察および議論を行なうことができる。
授業方法と留意点	東アジア地域研究に関する文献資料を講読し、討議する。
授業 (指導) 計画	履修者の関心に基づいて選定した東アジア地域研究に関する文献資料を講読し、討議する。 また、履修者自身が自身の先行研究となるべき研究論文を選び、報告を行なう。
事前・事後学習課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・購読文献については、事前に目を通し、論点をまとめておく。</li> <li>・文献報告に必要な準備を行なう。</li> </ul> (合計 60 時間)
評価基準	<b>【成績評価の方法】</b> 講義への参加状況および個人報告をもとに、総合的に評価する。
教材等	授業時に指示する。
備考	

科目名	アジア言語文化特論ⅢB	科目名 (英文)	Topics in Asian Languages and Cultures III B
配当年次	1年	単位数	2
学期 (開講期)	後期	授業担当者	田中 悟

授業 (指導) 概要・目的	東アジアの地域研究に関する様々な文献を取り上げ、その内容について考察・検討を加える。事例研究や関心分野の研究動向についての正確な知識を得ることを目的とする。
到達目標	東アジア地域研究についての基礎的な知識を有し、先行研究を踏まえた考察および議論を行なうことができる。
授業方法と留意点	東アジア地域研究に関する文献資料を講読し、討議する。
授業 (指導) 計画	履修者の関心に基づいて選定した東アジア地域研究に関する文献資料を講読し、討議する。 また、履修者自身が自身の先行研究となるべき研究論文を選び、報告を行なう。
事前・事後学習課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・購読文献については、事前に目を通し、論点をまとめておく。</li> <li>・文献報告に必要な準備を行なう。</li> </ul> (合計 60 時間)
評価基準	<b>【成績評価の方法】</b> 講義への参加状況および個人報告をもとに、総合的に評価する。
教材等	授業時に指示する。
備考	

科目名	アジア言語文化特論ⅣA	科目名 (英文)	Topics in Asian Languages and Cultures IV A
配当年次	1年	単位数	2
学期 (開講期)	前期	授業担当者	古矢 篤史

授業 (指導) 概要・目的	近代日本文学におけるアジア表象を考察する。明治期から戦後にかけて、日本の植民地となったアジア諸地域が、文学のなかでどのように描かれていたかを考える。取りあげる作家は、芥川龍之介、谷崎潤一郎、横光利一などを予定している。また、アジア諸地域出身の作家による日本語作品についても論じたい。近代のアジアをめぐる日本語・日本文学についての知識や理論を得ることが目的となる。
到達目標	近代のアジアをめぐる日本語・日本文学について説明し、論考をまとめることができる。
授業方法と留意点	作品を選定し、文献を調査の上、論考をレポートにまとめる。
授業 (指導) 計画	1、作品の選定 2、文献の調査 3、発表とフィードバック 4、レポートの作成と提出
事前・事後学習課題	事前には授業で扱う文献を読む等の準備をする。 事後には授業ごとの課題に取りくむ。
評価基準	平常点 (発表内容とレポート) により評価する (100%)。
教材等	授業時に指示する。
備考	

科目名	アジア言語文化特論IV B	科目名 (英文)	Topics in Asian Languages and Cultures IV B
配当年次	1年	単位数	2
学期 (開講期)	後期	授業担当者	古矢 篤史

授業 (指導) 概要・目的	「アジア言語文化特論IV A」に引き続き、近代日本文学におけるアジア表象を考察する。明治期から戦後にかけて、日本の植民地となったアジア諸地域が、文学のなかでどのように描かれていたかを考える。取りあげる作家は、芥川龍之介、谷崎潤一郎、横光利一などを予定している。また、アジア諸地域出身の作家による日本語作品についても論じたい。近代のアジアをめぐる日本語・日本文学についての知識や理論を得ることが目的となる。
到達目標	近代のアジアをめぐる日本語・日本文学について説明し、論考をまとめることができる。
授業方法と留意点	作品を選定し、文献を調査の上、論考をレポートにまとめる。
授業 (指導) 計画	1、作品の選定 2、文献の調査 3、発表とフィードバック 4、レポートの作成と提出
事前・事後学習課題	事前には授業で扱う文献を読む等の準備をする。 事後には授業ごとの課題に取りくむ。
評価基準	平常点 (発表内容とレポート) により評価する (100%)。
教材等	授業時に指示する。
備考	

科目名	アジア言語文化特論V A	科目名 (英文)	Topics in Asian Languages and Cultures V A
配当年次	1年	単位数	2
学期 (開講期)	前期	授業担当者	橋本 正俊

授業 (指導) 概要・目的	《日本古典文学 I》 日本古典文学に関する様々な文献を取り上げて論じる。 特に平安時代から中世にかけての作品を取り上げて論じる。 あわせて、中世の辞書や、研究文献も取り上げて、日本語・日本文学研究の問題点について考察する。 文学作品を通して、日本語・日本文学についての正確な知識を得ることを目的とする。
到達目標	日本語・日本文学文献の表記、表現について、正確に説明し、考察することができる。
授業方法と留意点	資料及び文献を講読し、論じる。
授業 (指導) 計画	資料について調べ、講読する。 講義をし、その特徴、注目すべき点について論じる。 課題を提出する。
事前・事後学習課題	・事前に購読予定の資料を通読の上、疑問点をまとめておく。 ・課題の作成。
評価基準	受講状況および課題等により総合的に評価する (100%)。
教材等	授業時に指示する。
備考	事前事後学修時間の目安は 60 時間

科目名	アジア言語文化特論V B	科目名 (英文)	Topics in Asian Languages and Cultures V B
配当年次	1年	単位数	2
学期 (開講期)	後期	授業担当者	橋本 正俊

授業 (指導) 概要・目的	《日本古典文学II》 日本古典文学に関する様々な文献を取り上げて論じる。 特に中世から近世にかけての作品を取り上げて論じる。 あわせて、中世の辞書や、研究文献も取り上げて、日本語・日本文学研究の問題点について考察する。 文学作品を通して、日本語・日本文学についての正確な知識を得ることを目的とする。
到達目標	日本語・日本文学文献の表記、表現について、正確に説明し、考察することができる。
授業方法と留意点	資料及び文献を講読し、論じる。
授業 (指導) 計画	資料について調べ、講読する。 講義をし、その特徴、注目すべき点について論じる。 課題を提出する。
事前・事後学習課題	・事前に購読予定の資料を通読の上、疑問点をまとめておく。 ・課題の作成。
評価基準	受講状況および課題等により総合的に評価する (100%)。
教材等	授業時に指示する。
備考	事前事後学修時間の目安は 60 時間

科目名	アジア言語文化特論VIA	科目名 (英文)	Topics in Asian Languages and Cultures VI A
配当年次	1年	単位数	2
学期 (開講期)	前期	授業担当者	門脇 薫

授業 (指導) 概要・目的	第2言語としての日本語の習得研究の観点から、日本語教育に関わる種々の問題を見ていく。具体的には、第2言語習得 (Second Language Acquisition: SLA) の理論、外国人学習者の日本語の習得過程、日本語の習得研究、第2言語習得研究と日本語指導等について取り上げる。
到達目標	言語習得研究、及び語学教育に関する知識を得、日本語及び資料を分析する力を養う。
授業方法と留意点	文献及び資料を講読し、諸問題について討論する。また各自の課題発表について意見交換を行う。
授業 (指導) 計画	文献及び資料の講読・討論・課題に関する調査分析及び発表
事前・事後学習課題	指定された文献及び資料を読み、論点を把握し授業で議論ができるよう自分なりの考えをまとめておく。発表担当者はレジュメを作成し発表準備を行う。授業後は授業での意見交換した内容をふまえてまとめのレポートを書く。(合計 30h)
評価基準	授業における討論 (10%)・発表 (30%)・レポート (60%) 等により総合的に評価する。
教材等	授業時に指示する。
備考	門脇研究室 7号館4階

科目名	アジア言語文化特論VIB	科目名 (英文)	Topics in Asian Languages and Cultures VI B
配当年次	1年	単位数	2
学期 (開講期)	後期	授業担当者	門脇 薫

授業 (指導) 概要・目的	第2言語としての日本語の習得研究の観点から、日本語教育に関わる種々の問題を見ていく。具体的には、第2言語習得 (Second Language Acquisition: SLA) の理論、外国人学習者の日本語の習得過程、日本語の習得研究、第2言語習得研究と日本語指導等について取り上げる。
到達目標	言語習得及び語学教育に関する知識を得、日本語及び資料を分析する力を養う。
授業方法と留意点	文献及び資料を講読し、諸問題について討論する。また各自の課題発表について意見交換を行う。
授業 (指導) 計画	文献及び資料の講読・討論・課題に関する調査分析及び発表
事前・事後学習課題	関連するテーマについて文献・資料収集を行う。授業前に文献及び資料を読み、論点を把握し授業で議論ができるよう自分なりの考えをまとめておく。発表担当者はレジュメを作成し発表準備を行う。授業後は授業での意見交換した内容をふまえてまとめのレポートを書く。(合計 30h)
評価基準	授業における討論 (10%)・発表 (30%)・レポート (60%) 等により総合的に評価する。
教材等	授業時に指示する。
備考	門脇研究室 7号館4階

科目名	アジア地域文化特論 I A	科目名 (英文)	Topics in Asian Regions and Cultures I A
配当年次	1 年	単位数	2
学期 (開講期)	前期	授業担当者	森 類臣

授業 (指導) 概要・目的	本授業では朝鮮半島の近現代史・現代社会・大衆文化について学ぶ。歴史的还是は社会科学視座からコリア (Korea) を捉え理解することが本授業の目的である。授業は、テーマごとに講義形式と発表・議論のセットで行う。文献をあらかじめ提示するので、それを読んで要約し論点を把握してから授業に臨むことが求められる。
到達目標	1) 朝鮮半島の近現代史を概説できる。 2) 南北分断の起因と現状、論点を概説できる。 3) 南北朝鮮 (大韓民国・朝鮮民主主義人民共和国) の社会・文化についてその特徴を論じることができる。
授業方法と留意点	1) レジюмеおよび文献を使用する。受講生は指定された文献を事前に読み要約や論点整理をしていくことが求められる。 2) 授業では、教員と受講生との議論、受講生同士の議論を重要視する。
授業 (指導) 計画	1. イントロダクション 2-4. 朝鮮半島の近現代史概説 5. 発表と議論 6-7. 南北分断と朝鮮戦争 8. 発表と議論 9-11. 韓国社会と大衆文化 12-14. 朝鮮民主主義人民共和国 (北朝鮮) の社会と大衆文化。 15. 発表と議論
事前・事後学習課題	1) 事前に提示された文献を読み、要約と論点把握をした上で授業に臨むこと。 2) 授業中に提示された課題を提出すること。 3) 発表の準備をしておくこと。
評価基準	1) 課題 30% 2) 発表 40% 3) 期末レポート&インタビュー試験 30%
教材等	授業時に指示する。
備考	

科目名	アジア地域文化特論 I B	科目名 (英文)	Topics in Asian Regions and Cultures I B
配当年次	1 年	単位数	2
学期 (開講期)	後期	授業担当者	森 類臣

授業 (指導) 概要・目的	本授業では朝鮮民族の対外認識を踏まえたうえで、分断体制出現以降の南北朝鮮関係と国際関係について学ぶ。歴史的还是は社会科学視座から韓国 (Korea) を捉え理解することが本授業の目的である。授業は、テーマごとに講義形式と発表・議論のセットで行う。文献をあらかじめ提示するので、それを読んで要約し論点を把握してから授業に臨むことが求められる。
到達目標	1) 朝鮮半島分断以降の南北関係 (大韓民国と朝鮮民主主義人民共和国の関係) を概説できる。 2) 大韓民国と朝鮮民主主義人民共和国それぞれの国際関係を論じることができる。
授業方法と留意点	1) レジユメおよび文献を使用する。受講生は指定された文献を事前に読み要約や論点整理をしていくことが求められる。 2) 授業では、教員と受講生との議論、受講生同士の議論を重要視する、
授業 (指導) 計画	1. イントロダクション 2. 朝鮮民族の対外認識 3-5. 南北関係と統一論 6. 発表と議論 7-9. 国際関係 (1) : 米国・中国・ロシアなど諸国家との関係 10. 発表と議論 11-14. 国際関係 (2) : 日韓・日朝関係 15. 発表と議論
事前・事後学習課題	1) 事前に提示された文献を読み、要約と論点把握をした上で授業に臨むこと。 2) 授業中に提示された課題を提出すること。 3) 発表の準備をしておくこと。
評価基準	1) 課題 30% 2) 発表 40% 3) 期末レポート 30%
教材等	授業時に指示する。
備考	

科目名	アジア地域文化特論ⅡA	科目名 (英文)	Topics in Asian Regions and Cultures II A
配当年次	1年	単位数	2
学期 (開講期)	前期	授業担当者	上田 達

授業 (指導) 概要・目的	<p>文化人類学における「理解」がどのようなものであるかを示すことを、講義の主たる目的とする。まず、初期の文化人類学から今日にいたる学問の歴史を俯瞰しつつ、そのなかで採用されてきた枠組みを素描する。そのうえで、受講者の関心も聞きながら具体的なトピックを選んで、その民族誌的な成果や意義について検討する。</p> <p>授業は主に講義形式で行う。参考となる文献をあらかじめ配布するので、読んできたことを前提として内容について解説と補足を行う。また、受講者には文献の内容について報告する機会を適宜設ける。参考文献の詳細は初回の授</p>
到達目標	文化人類学的なものの見方ができるようになることと、自らそれを用いて考えられるようになることを目指す。
授業方法と留意点	講義と受講者との文献の講読を進める。文献は日本語のものと英語のものを用いる。受講者には事前と事後の課題を出すので、積極的に取り組むことが求められる。
授業 (指導) 計画	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. イントロダクション</li> <li>2. 文化人類学のはじまり</li> <li>3. 文化人類学の展開</li> <li>4. 事例研究――親族</li> <li>5. 事例研究――呪術と宗教</li> <li>6. 文化人類学の展開</li> <li>7. 事例研究――贈与、経済</li> <li>8. 文化人類学の展開</li> <li>9. 文化人類学と植民地主義</li> <li>10. 事例研究――政治</li> <li>11. 文化人類学の洗練</li> <li>12. 事例研究――儀礼</li> <li>13. 文化人類学と近代社会</li> <li>14. 事例研究――都市</li> <li>15. まとめ</li> </ol>
事前・事後学習課題	<p>事前：受講者は指定する文献 (和文・英文) を予め読んでくること。授業時に文献に記されていることの理解度を問う課題を出す。</p> <p>事後：既習事項を確認するとともに、講義中に言及した文献の該当箇所について読むこと。</p>
評価基準	授業への参加とレポートによる。詳細は初回の授業時に指示する。
教材等	授業時に配布する資料を用いる。参考文献については初回に詳細を指示する。
備考	

科目名	アジア地域文化特論ⅡB	科目名(英文)	Topics in Asian Regions and Cultures II B
配当年次	1年	単位数	2
学期(開講期)	後期	授業担当者	上田 達

授業(指導)概要・目的	文化人類学における理解がどのようなものであるかを示すことを、講義の主たる目的とする。いくつかの現代的なトピックを検討することを通じて、文化人類学の理解の特質や現代におけるその意義を示す。 授業は講義を中心とする。参考となる文献をあらかじめ配布するので、読んできたことを前提として内容について解説と補足を行う。また、受講者には内容について報告する機会を設ける。
到達目標	文化人類学的なものの見方ができるようになることと、自らそれを用いて考えられるようになることを目指す。
授業方法と留意点	講義と受講者との文献の講読を進める。文献は日本語のものや英語のものを用いる。受講者には事前と事後の課題を出すので、積極的に取り組むことが求められる。
授業(指導)計画	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. イントロダクション</li> <li>2. 文化人類学とは何か</li> <li>3. 文化人類学と隣接する諸領域</li> <li>4. 文化人類学の到達地点</li> <li>5. 事例研究 政治---文献講読</li> <li>6. 事例研究 政治---講義</li> <li>7. 事例研究 市場---文献講読</li> <li>8. 事例研究 市場---講義</li> <li>9. 事例研究 開発---文献講読</li> <li>10. 事例研究 開発---講義</li> <li>11. 事例研究 医療---文献講読</li> <li>12. 事例研究 医療---講義</li> <li>13. 事例研究 自然と文化---文献講読</li> <li>14. 文化人類学における理</li> </ol>
事前・事後学習課題	事前：受講者は指定する文献(和文・英文)を予め読んでくること。授業時に文献に記されていることの理解度を問う課題を出す。 事後：既習事項を確認するとともに、講義中に言及した文献の該当箇所について読むこと。
評価基準	授業への参加とレポートによる。詳細は初回の授業時に指示する。
教材等	授業時に配布する資料を用いる。参考文献については初回に詳細を指示する。
備考	

科目名	アジア地域文化特論ⅣA	科目名 (英文)	Topics in Asian Regions and Cultures IV A
配当年次	1年	単位数	2
学期 (開講期)	前期	授業担当者	赤澤 春彦

授業 (指導) 概要・目的	日本の歴史を理解すること、また文献史学の方法論を修得することを目的とする。日本の歴史にかかる重要な論点を整理・評価し、古文書や古記録などの具体的な史料に基づいて検討する。本講義では、古代から中世の代表的な学説をいくつか取り上げて講読し、その学説にかかわる史料を取り上げて再検討する。
到達目標	日本史の理解と文献史学の方法論を修得する。 史料の読解力を身につける。
授業方法と留意点	日本古代から中世にかかる重要な文献や史料を講読し、論点を整理する。 教員との質疑応答を通して理解を深める。
授業 (指導) 計画	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 古代王権と天皇家</li> <li>2. 律令国家の形成</li> <li>3. 律令制の解体と摂関政治・官司請負制</li> <li>4. 院政</li> <li>5. 武士論</li> <li>6. 鎌倉幕府論</li> <li>7. 荘園制</li> <li>8. 古代～中世前期における宗教</li> <li>9. 室町幕府と守護領国制</li> <li>10. 戦国大名論</li> <li>11. 対外関係論</li> <li>12. 交通・流通と貨幣経済の展開</li> <li>13. 都市論</li> <li>14. 生活史</li> <li>15. 総論 日本における古代・中世の特質</li> </ol>
事前・事後学習課題	事前：教員が指定する文献・史料を講読してレジュメにまとめる。 事後：教員との質疑応答を通して気付いたことなどをレポートにまとめる。
評価基準	報告とレポート
教材等	適宜資料を配布する
備考	

科目名	アジア地域文化特論ⅣB	科目名 (英文)	Topics in Asian Regions and Cultures IV B
配当年次	1年	単位数	2
学期 (開講期)	後期	授業担当者	赤澤 春彦

授業 (指導) 概要・目的	日本の歴史を理解すること、また文献史学の方法論を修得することを目的とする。日本の歴史にかかる重要な論点を整理・評価し、古文書や古記録などの具体的な史料に基づいて検討する。本講義では、古代から中世の代表的な学説をいくつか取り上げて講読し、その学説にかかわる史料を取り上げて再検討する。
到達目標	日本史の理解と文献史学の方法論を修得する。 史料の読解力を身につける。
授業方法と留意点	日本近世から近代にかかる重要な文献や史料を講読し、論点を整理する。 教員との質疑応答を通して理解を深める。
授業 (指導) 計画	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 織豊政権論</li> <li>2. 織豊期の対外関係</li> <li>3. 幕藩体制論</li> <li>4. 近世身分論</li> <li>5. 都市と村落</li> <li>6. 流通と交通</li> <li>7. 文化と教育</li> <li>8. 明治維新と近代化</li> <li>9. 明治国家と日清・日露戦争</li> <li>10. 立憲主義と帝国主義</li> <li>11. 大正期の民衆運動</li> <li>12. 近代の教育制度と学問</li> <li>13. 2つの大戦と国民</li> <li>14. 戦後史</li> <li>15. 総論 日本における近世・近代の特質</li> </ol>
事前・事後学習課題	事前：教員が指定する文献・史料を講読してレジュメにまとめる。 事後：教員との質疑応答を通して気付いたことなどをレポートにまとめる。
評価基準	報告とレポート
教材等	適宜資料を配布する
備考	

科目名	アジア地域文化特論V A	科目名 (英文)	Topics in Asian Regions and Cultures V A
配当年次	1年	単位数	2
学期 (開講期)	前期	授業担当者	金子 正徳

授業 (指導) 概要・目的	「文化人類学」および「地域研究」に関する講義、および、「文化人類学」および「地域研究」における研究成果物 (民族誌や学術論文など) の精読を通じて、現代の文化・社会を読み解く力をつける。
到達目標	「文化人類学」および「地域研究」における基礎的な研究手法を用い、学術的な分析ができる。
授業方法と留意点	本講義では、日本語あるいは英語で書かれた民族誌や学術論文を用いる。十分な事前学習と事後学習が必要である。テーマに関するフィールドワークを課す。
授業 (指導) 計画	<ol style="list-style-type: none"> <li>1) イントロダクション: 「文化人類学」と「地域研究」</li> <li>2) 東南アジアの「統計」を読む (その1)</li> <li>3) 東南アジアの「統計」を読む (その2)</li> <li>4) 東南アジアの「新聞記事」を読む (その1)</li> <li>5) 東南アジアの「新聞記事」を読む (その2)</li> <li>6) 東南アジアの「宗教」関連の論文 (その1)</li> <li>7) 東南アジアの「宗教」関連の論文 (その2)</li> <li>8) 東南アジアの「儀礼」関連の論文 (その1)</li> <li>9) 東南アジアの「儀礼」関連の論文 (その2)</li> <li>10) 東南アジアの「医療」関連の論文</li> <li>11) 東南アジア</li> </ol>
事前・事後学習課題	事前: 受講者は指定する文献 (和文・英文) をあらかじめ読んでくること。 事後: 既習事項を確認するとともに、講義中に言及した文献の該当箇所について読むこと。
評価基準	ディスカッションおよび発表 (50%)、レポート (50%)
教材等	授業時に配布する資料を用いる。参考文献については初回に詳細を指示する。
備考	

科目名	アジア地域文化特論V B	科目名 (英文)	Topics in Asian Regions and Cultures V B
配当年次	1年	単位数	2
学期 (開講期)	後期	授業担当者	金子 正徳

授業 (指導) 概要・目的	「文化人類学」および「地域研究」に関する講義、および、「文化人類学」および「地域研究」における研究成果物 (民族誌や学術論文など) の精読を通じて、現代の文化・社会を読み解く力をつける。
到達目標	「文化人類学」および「地域研究」における基礎的な研究手法を用い、学術的な分析ができる。
授業方法と留意点	本講義では、日本語あるいは英語で書かれた民族誌や学術論文を用いる。十分な事前学習と事後学習が必要である。テーマに関するフィールドワークを課す。
授業 (指導) 計画	<ol style="list-style-type: none"> <li>1) イントロダクション</li> <li>2) 「インドネシア」の概要について学ぶ (その1)</li> <li>3) 「インドネシア」の概要について学ぶ (その2)</li> <li>4) 「インドネシア」の概要について学ぶ (その3)</li> <li>5) インドネシアの「民族誌」を読む (その1)</li> <li>6) インドネシアの「民族誌」を読む (その2)</li> <li>7) インドネシアの「民族誌」を読む (その3)</li> <li>8) インドネシアの「民族誌」を読む (その4)</li> <li>9) インドネシアの「民族誌」を読む (その5)</li> <li>10) インドネシアの「民族誌」を読む (その6)</li> <li>11) インドネシ</li> </ol>
事前・事後学習課題	事前：受講者は指定する文献 (和文・英文) をあらかじめ読んでくること。 事後：既習事項を確認するとともに、講義中に言及した文献の該当箇所について読むこと。
評価基準	授業への参加とレポートによる。詳細は初回の授業時に指示する。
教材等	授業時に配布する資料を用いる。参考文献については初回に詳細を指示する。
備考	